

銀の歴史
銀の文化財



題字 宇井逸郎
カツト 旧正法寺軒丸瓦

(小倉界三氏藏)

発刊にあたつて

いただけばさいわいです。



四條畷市長 森本 稔

四條畷の歴史は古く、市内には数多くの貴重な文化財が
のこされています。

このたび、こうした四條畷の歴史と市内に散在する文化
財についてのやさしい解説書として「畷の歴史・畷の文化
財」を発刊いたしました。

以前、櫻井敬夫氏が本市の広報紙上に連載された内容
に、さらに新しくわかつたことがらを加え、市総務部庶務
課で編集したもので、平易な解説文と豊富な写真・図版
によりみなさんに親しんでいただけるよう工夫しております。

ご愛読いただき、四條畷の祖先の努力のあとをたどるよ
すがにされ、また、市内散策のおりのガイドブックにして

発刊を祝して



暇古文化研究保存会

会長 中田 勝三

このたび、市当局のお骨折りで「暖の歴史・暖の文化財」の小説を発行していただきましたことは、私どもの望外のよろこびでございます。

本市の郷土紹介誌の発行につきましては、私ども研究保

存会の多年の念願でございました。幸に著者・櫻井敬夫先生が、昭和四十五年秋から「暇の歴史・暇の文化財」と題

幸にこの書が市民各位の座右に備えられ、再読いたたけば其だ幸いに存じます。

終りに、執筆者、編集者、市当局に対して、心から厚くお礼を申しあげ、お祝いの言葉をいたします。

をしてまいりましたが、今、この結実をみるとことができましたことは、私ども郷土の歴史と文化を愛する者として感謝にたえません。

ご承知のとおり、執筆者の櫻井先生は、当市南中の校長先生（現教育長・研究保存会副会長）の時代から、私どもの暖をこよなく愛され、暖の郷土史、暖の古文化に特に関

日 次

山野を駆ける

讃良川の流れ.....

ナイフ型の石器.....

縄文の時代.....

石の鎌と皮はぎ.....

縄目の土器.....

舟をうかべて.....

米づくりの里

弥生の時代.....

単辯の軒丸瓦.....

21

19

17

15

12

10

7

木の葉をのこした土器.....
原始の人々の祈り.....

22
23

古墳築造のころ

古墳の時代.....

忍ヶ岡古墳.....

墓の堂古墳.....

石棺.....

漢式土器.....

32

31

29

27

26

白鳳の甍—正法寺址—

34

礎 石 35

三重の塔 36

まばろしの寺々

讃 良 寺 38

小 松 寺 39

千 聲 敷 41

みちしるべ

東高野街道 44

消流街道 45

みちしるべ 46

あし辺の物語

深 野 池 49

雁 塚 51

あの溝この道 52

楠の大樹

小楠公墓地 55

和田賢秀墓地 57

夢のあと

飯盛城址 59

田原城址	60
大坂の陣と忍ヶ岡	62

石造の遺物

逢阪の五輪塔	64
田原・住吉神社境内の石風呂	65
十三仏石塔	67

砂・岡山キリシタンと制札

砂・岡山キリシタン	69
制札	70

田原の里

田原の里	77
天の川	78

さざぞうの花咲くほとり

室	79
池	79

線路にそつて

宝曆の絵地図	80
--------	-------	----

觀音さまと薬師さま	73
大正寺の聖觀音像	73

古い井戸	83
木簡	85
家型の埴輪	85

正傳寺の薬師如来像	75
-----------	-------	----

山野を駆ける

讃良川の流れ

—四條畷の土地のなりたち—

四十億年を数えるながい時の流れの中で、地球は現代の私たちには想像もできないほどの変化をしながら今日に至っているが、今は現在の陸地ができる頃、今より二百万年から一万年前にかけての時期を氷河時代とよんでいる。その名がしめす通り、この時代は地球が非常に寒冷な気候におそれ、そのひどい時には、地球の四分の一も氷におおわれた時もあった。この一百万年の間には、寒い氷期が四回おとされたことが明らかにされている。もちろん、今日

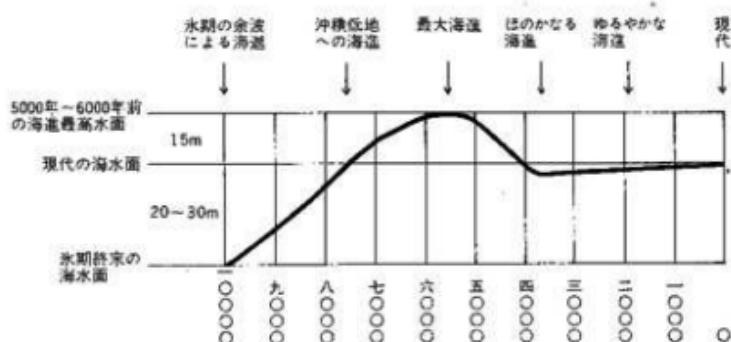
から明日にすぐというわけではなく、気温は徐々に寒さを加え、その極点に達した後、こんどは徐々に温かさをとりもどし、今よりも暑い時期をむかえる。この期間を間氷期といつて、そしてまた寒い氷期をむかえるといつたりかえしをしてきたのである。

私たちが身近かに仰ぐ飯盛山、さらに田原につづく山々は、花崗岩でできているが、この生駒山系によりそうよう、に赤土の低い山や、台地がつづいている。行者山、忍ヶ丘、



第四紀初頭の日本
(澤・井尻 日本列島・岩波新書による)

沖積時代における海進海退による海面の昇降について
(片山氏による)



さらに打上より北に香里台地、交野ヶ原、これらの台地は、この氷河時代にできた土地なのである。この赤土の地層を洪積層とよび、暖高より以西の黒土の平地を沖積層とよんでいる。洪積層には、粘土層、細砂層、あるいは砂利層等がおりかさなっているのに気づく。一体これはどうしてできたのであろうか。

水い年月の間、くりかえす寒冷と温暖の日々、蒸発する水分は、寒い時には雪となり氷となって地球をおおい、温暖の折には、厚くおおつた氷もとけ、今、想像する以上の大雨は、岩をけずり、土砂を押し流して海にそそいだことであろう。大きな砂利層は大雨の時に、粘土層は静かな雨の時に……。このようにしてできた地層がありあり、現在見る赤土の山や丘になつたのである。

この寒冷と温暖のそれぞれの時期には、海岸線にも大きな変化があらわれる。寒冷の折には、水蒸気は雪となり、氷となつて厚く地球をおおうため、海水は減少し、海水面ははるかに低くなる。きびしい寒期の極にはそれが一二三〇メートルばかり、それにともない海は十あがり、陸地は海へ海

へとひろがつてゆく。逆に温暖の時は、水が大量にとけ、降りそそぐ雨の量もまし、海面が上昇し陸地に海が浸入することになる。

図は、氷河時代も終り、沖積時代に入る一万年前から現代までの気温と海水面の変化の様子を示しているが、おだやかな沖積時代になつてもこのような変化をみるとができるのである。

生駒山系にそびえ立つ山すそは、大阪東部ではこのあたりが一番低くなつておらず、七千五百年前から海水がこの低地に侵入し、五千五百年前には赤土のこの山すそは海水であらわれる状態となつていた。この時の海進は、現在の地図でみる標高十五メートルのところまでせまつていたものと思われる。やがて各河川から流れこむ土砂は、この入江に土を堆積し、地盤の隆起と相まって、この河内の入江は次第に浅くなり、また入江には島々が頭を出してきた。森小路高潮、三ツ島、二タ島、ひえ島、三ヶの島などは、当時のこの状況を物語っている。およそ二千年から十五五百年前の様子である。

奈良・平安・鎌倉の各時代にも幾分沖積平野の地盤の上界はつづいたが、河内で一番低いこの山すそはなかなか引かず、以前の大和川、寝屋川、古川の水が入りこみ、大きな沼沢をつくっていた。勿入瀬、新開池、深野池がこれで、深野池は当市西南方一帯に広くひろがつていた。およそ今の外環状線がそのなきさであったと思われる。

江戸時代になつても、度々の大洪水は河内の人達を苦しめ、寛永の頃から元禄の六十五年間に、一五回の大洪水に見舞われた記録がある。そこで、当時の中河内の東六郷村今木の庄屋・中甚兵衛は、この土地の改良のため命をとして努力し、ついに国府から北に流れていた大和川を、現在のようすに、堺方面につけかえることに成功した。このため何千年間も低地帯を覆っていた河内の水はひき、その底をあらわし、後の土地改良と相まって美田を得ることになったのである。

私たちの郷土四條畷は、この河内の北部にあって、東から田原盆地、花崗岩の山、それについて西に沖積時代の赤土の山、そして沖積の平地となつてゐる。この土地の上

に、万をかぞえる年月の昔から、私たちの祖先の生活が営まれてきたのである。

ナイフ型の石器

私たち日本人の祖先は、いつたいどのようにして、いつごろからこの国土に住みついたのであろうか。日本人の起源については、一応誰もが疑問に思い、解明したいと考えることがらの一つであろう。

しかし、はるかな人類の進化の足あとを究めることはなかなかむずかしい課題である。一部の学者の研究はあったが、昭和二十年、終戦の頃までわが国には縄文時代以前の研究はあまり行なわれず、ヨーロッパ、中国、あるいは東南アジアの古い時代（旧石器時代）にあたる遠い昔については、全く不明の状態であった。

昭和二十三年、相沢忠洋氏によつて、群馬県岩宿の赤土（関東ローム層で、一万年から数万年前にできた地層、今まで石器も発見されず、もちろん人類はこの時期には住んでいなかつたとされていた地層）の中から、数万年をかぞ

調査風景（昭和46年）



える昔の人たちが使った石器が発見された。

このことは、わが国にも西欧の旧石器時代とならぶ古い時代に人類が住んでいたことを証明づける大きな発見となつた。これをきっかけに、各地の調査も進み、現在では日



ナイフ型石器

本の各地からこの時代の石器が発見され、また牛川人、三ヶ日人といわれる古い人類の化石も発見された。

前にも説明したように、氷期には海水が減少し、陸地が広がってゆく状況をわが国にあてはめてみると、大阪湾、瀬戸内海も陸地域は沼澤であり、つづいて西方、大陸にも陸地がつづいていたのである。友ヶ島、播磨灘、或は瀬戸内海の各地から多くの旧象の化石が発見されているが、これららの動物たちは、この陸の橋をわたり大陸からわが国に移り住んだのである。おそらくわれわれ日本人の祖先も、これらの動物たちの後をおつて、長年月の間に大陸から、或は南方からこの地へ来たのであろう。

写真のナイフの形をした石器は、岡山讃良川のほとりから、昭和文化研究保存会の手によって発見されたもので、洪積時代の終り頃、一万五年前に使用されたと考えられる石器である。これと類似のものは、以前忍ヶ丘から札埜、西尾両氏によつて採集されている。また写真の石器は、チヨツピングトール、ハンドアックスとよばれるもので、当時色々の用途に使われた万能の石器で、今より二万年も前



左：ハンドアックス 右：チョッピングツール

のものと推定されている。これらの石器は、当市にとつて最古の文化遺物として、まことに貴重な資料なのである。

ナイフ型の石器などの旧石器は、瀬良川畔以外に交野市の神宮寺、枚方市津田、打上でも発見されており、これらの分布から生駒山系北西部の洪積台地は、太古の人たちの生活に好適の場所であったということができるであろう。近畿地方では数少ないこの種の遺跡をもつこの洪積台地は、万をかぞえる古い時代の様子を物語ってくれる内容を埋蔵しているものと考えられ、今後の研究に大きな期待が寄せられている。

縄文の時代

ながい旧石器時代の後、原始の人々は、ついに土器をつくることに成功した。

粘土をねり、器をつくり、それを焼きしめて素焼の土器をつくる。縄文時代という名称は、この土器の表面に、縄

この文様がつけられてあったことから、名づけられたものである。土器を作る技術、それを生活の中で使用する方法を知つたことは、原始の生活の中で実に大きな発展といわねばならない。

さらに今一つ大きな進歩は、この土器の発明と同時に、弓矢を作り、使用しはじめたことである。えものをとる場合、今までは、丸太や檜、あるいは磯などを使っていたのであるが、いずれもあまり遠くない場所からの攻撃であった。これにくらべると、手のとどかない遠くのえものを射ることのできる弓矢の発明は、実に画期的なものといわねばならないであろう。（これは鉄砲の使用まで続く）したがって、縄文時代ということは、われわれの祖先がはじめて土器を作り、弓矢を発明し、これを使用しはじめた時代である。

この縄文時代は、今より約九千年前にはじまり、二千三百年前ごろまでの約七千年間とされている。九千年前といふことは、縄文時代で一番古いとされている夏島貝塚のカキの貝殻や木炭を資料として放射性炭素による年代測定法

さて、私たちの郷土のこの時代の様子はどうであつたであろうか。早期には、交野市神宮寺、枚方市穂谷、中期には交野市星田、後期・晩期には四條畷市岡山と、それぞれ各期に属する遺跡が発見されている。さきにのべた旧石器



枚方台地の縄文遺跡



更良岡山遺跡全景

時代の遺物を包含するこの北河内東北部の台地は、また、縄文時代の人たちが生活し、活躍した場所でもあつたのである。

縄文時代後期から晩期にかけての岡山遺跡は、忍が丘駅より北西約五百米、讃

良川の北岸の台地と、それに続く河岸段丘にひろがっている。

讃良川畔のこの遺跡は、川の侵蝕によつて東の山がけずりとられ、河内の沖積地がひらけるかなめに

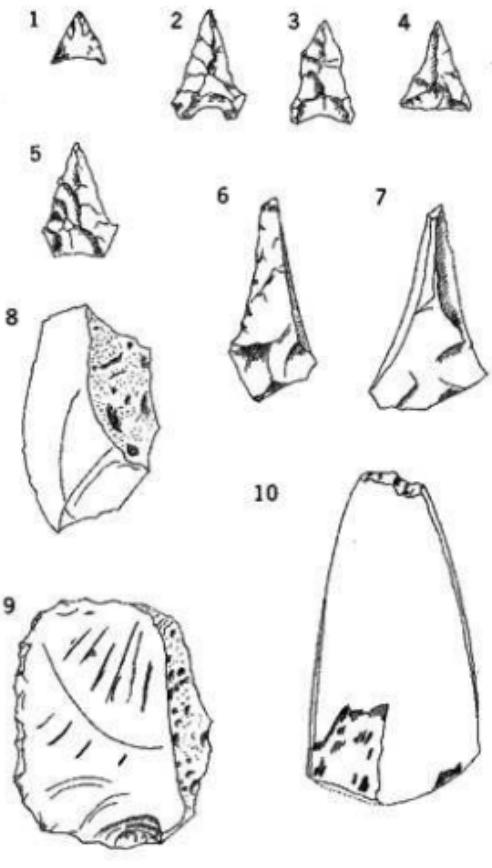
あつたている。

陽あたりもよく、しかも清冽な讃良川の流れをそばに控えたこの場所は、まことに原始の人たちにとつて格好の住居地であつたであろう。三千年前、私たちの祖先が、この地を住居と定め生活していた頃は、東の山々は今よりも高く、また谷もけわしかつたであろう。植物も繁茂し、木の実も多く、鹿、きじはじめ多くの鳥獸が山にいたことであろうし、海に続く西の沼沢地には水鳥の群、豊富な魚貝も多く、日々の生活にことかかない最適の場所であつたにちがいない。

海をへだてて、はるか六甲の山々の彼方に沈む真赤な夕陽にもかく、狩を終えてわが家に帰る男たちは、また、火を守り、子どもを育て、夕餉の用意をする女たちは、何を感じ、何を考えていたことであろうか。

石の鍬と皮はぎ

縄文時代の後期、晩期——今から三千五百年前から二千



石の鍬・皮はぎなど

三百年前までの約千二百年あまりの時期——岡山縄文遺跡
——この遺跡は、岡山新池北側の段丘から寝屋川市国守町
の南側台地、東は高野街道西白米あたりから、西方台地突
端までの間にひろがっている模様で、土器片、石器片、或
は住居址を示す炭のまじった黒い土層をみることができる。
近畿地方としては数少ない縄文遺跡として、
この岡山縄文遺跡は、
実に貴重な存在といわ
ねばなるまい。かつて、
片山長三氏指導のもと
に畠高生がこの地の調
査を行なつたが、その後
久しう間そのままとな
つていた。(この時の遺
物は大阪市立博物館所
蔵)その後住宅ブーム
はこの地にも及び、昭

和四十六年、昭古文化研究保存会が、文化庁、府教委の指導のもとに調査を行なった。少範囲であつたが、その結果、この時代を物語る数多くの資料が発掘された。まずこの調査によつて出土した石器類から紹介することにしよう。

○石鎌（石のやヒリ）(1) - (5)

石で作つた道具のうち、一番数多く出土したもので、石の質はサヌカイト（安山岩の一種で、近くでは二上山がその産地）で、形の小さいものほど丁寧に打ちかいている。一つ一つあたつていく中で、当時の技術のすばらしさを、よくうかがいことができる。この時代の特徴として、いずれも革をもたないものばかりである。

○石錐（右のきり）(6)、(7)

サヌカイトを打ちかき、その尖端を錐のようにするどくしたもので、おそらく毛皮などを縫い合わせるために、穴を開ける道具として使用したものであろう。

○皮はぎ (8)、(9)

この種の石器も数多く出土し、いずれも石質はサヌカイト、片面はするどい刃になつていて、手にもつてそのまま使用できるものもあり、柄をつけて使用したと考えられるものもある。樹皮をはいだり、肉を切るために使用したものであろう。

○石斧（石のおの）(10)

斧の形ができるあがつたものをさらに磨き、刃の部分をすりこした（磨製石斧）と、打ちかいただけのもの（打製石斧）との二種類があり、硬砂岩、片岩などで作られたものが多く、木の柄をつけ、色々なもののが断たために使用したものであろう。磨製のものはすぐれて美しい。

轟良川畔二千年前の昔、私たちの先祖が弓矢を持って山野を駆ける姿、石斧をふるつて材を切つている姿、石錐で衣服をつくろつている姿……私たちの目の前のこの石器は、原始の人々の生活の一こま一こまを物語つてくれるるのである。

縄目の土器

一面に霜のおりた朝、輝く朝日が清流の山からおどり出た。講良川畔、縄文の村の夜明け——。原始の人々は、この朝の太陽に對して、今日を迎えた生のよろこびと、今日一日の無事を願つて敬けんな祈りをささげたことであろう。私たちが新年を迎えた朝の氣持と同じように、いやもつと純な氣持であったであろう。

一日の生活がはじまる中で、この岡山縄文の村では、土器の役割は相当深く根をおろしていたようである。縄文時代の後期・晚期のこの遺跡からは、数多くの土器片が出土したし、高杯の祖型と思われる縄文後期に属する器は、今、大阪市立博物館で大切に保管されている。土器の種類も多く、浅鉢、深鉢、かめ、注口土器など多くの種類に分類される。

上器製作法の発明、これは人類の歴史の中でも画期的な

進歩であり、生活の革命でもあった。

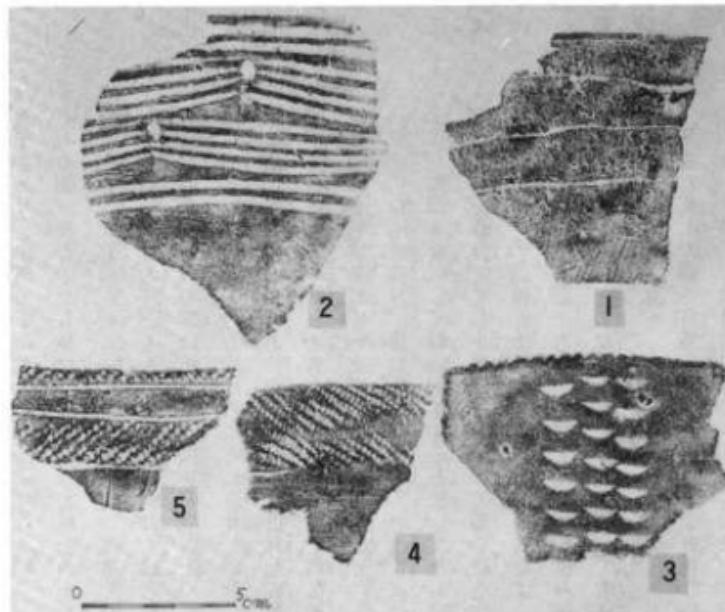
ある朝、炉の中から焼けて固くなつた粘土のかたまりを見た。これは、近くの山はだからとつて来た粘土をひねつて遊んでいた子どもが、そのまま炉ばたにころがしていたものが、いつの間にか火中に入り、焼き上つていたものである。粘土が火力を受けることにより、かたい質になることの発見の系図であった。やがて、これから粘土で器の形を作ること、これを火で焼きしめること、この器を日常生活に利用することへと發展する。

粘土のひもを作り、それを蛇がとぐろをまくように巻き上げ、表面をならして器の形を作る方法（まきあけ法）と、粘土の帶を作り、それを順につみあけて器の形を作る方法（輪積み法）の一、種が土器製作の方法であったようである。図は土器表面の撮影であるが、図1はこの輪積み法を使つて製作したもので、つなぎ目がそのまま残つて文様になつてゐることに気づく。

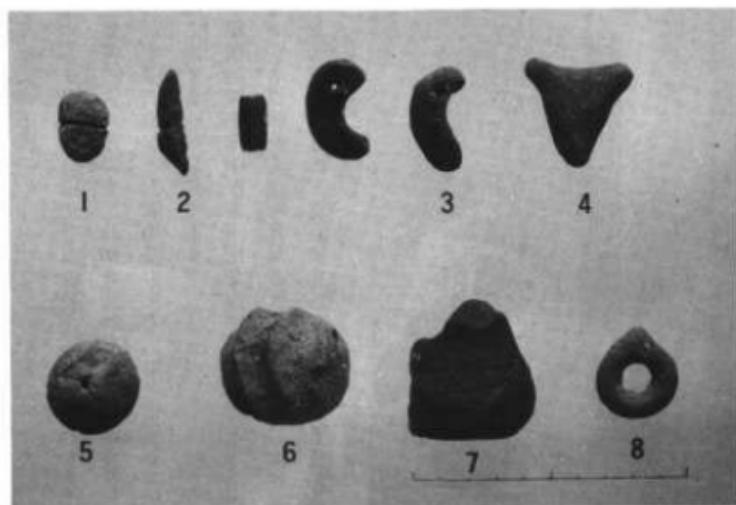
用途に応じた器を作る工夫とともに、より美しい器にしたいという美的な氣持も当然働き、その工夫がすい分となつてゐることに気づく。

されてきた。図2・3はそのことをよく物語つている。また図4は縄文の文様であり、よく観察すると、木の皮などからとった細いせんいをよって縄にし、約二種ほどのものを指先で器面におしつけ、四回か五回、手転させて文様をつけたことがよくわかる。図5の上器の左下の部分の文様は器面全体に縄文の文様をつけ、その後一部をすりけしている。この文様をすりけし縄文といっている。

縄文時代の時期の決定は、主にこれら土器の形と文様から推定され、当岡山遺跡は、滋賀里（滋賀県）櫻原（奈良県）船橋（大阪府）、馬場川（大阪府）遺跡出土の土器と傾向を同じくしている。これらのことから、三千年前にあっても、これらの地域とお互いに影響しあっていたことがうかがい知られる。



土器拓影



石錘・勾玉・土偶等

舟をうかべて

岡山繩文遺跡からは、先にのべた各種の石器や土器のはかに、当時の人々が使用したつりの道具や、装飾品も數は少ないけれども出土している。

清らかな讃良川の流れは、すぐ西側にあって海へと続いている沼沢にそいでいたが、そこには生活に欠くことのできない魚介類が豊かに生息していたと考えられる。

図1・2はこの沼沢で魚つりに使った石のおもりである。1は四瓣、2は一・七瓣で、それぞれ手ごろの石を加工し、ほぼ中央につり糸を結ぶ溝を作っている。(5)は土のおもりで、適当な大きさに粘土をねり、中央に糸を通す穴をあけ、おもりの役目をもたせている。また、網につけたであろうと思われる石の大きなおもりも出土している。

おそらく、丸太をくりぬいた舟も使用していたことであろう。飯盛山を背景に、この丸木舟にのり讃良川の岸をこ

き出して、沼沢でつりをしている原始の人々の姿を想像するのもまた楽しいことではないか。

当時の人たちにも、身体を装飾することは普及していたらしく、首飾などの装飾品も出土している。当時の生活を知る上で貴重な資料である。

縄文時代の中頃から、土で作った人形——土偶（どぐう）が各遺跡からよく発見されている。特に女性をあらわしたもののがほとんどで、獣物の豊富なることをねがい、子



更良岡山遺跡

孫の繁栄を願った信仰的要素をもつていたもののように見える。岡山遺跡出土のものは、完全なものではないが数体発見されており、貴重な資料となっている。(4) (7)

今まで、わずかの調査によつて判明した資料から、岡山縄文遺跡のこの範囲は、旧石器時代・縄文時代・讃良寺の遺構・遺物を包含する重要な遺跡であることを推測することができる。しかし、近世につけかえられたであろうと思われる讃良川の流路による遺跡の消滅、また、その後における住宅、工場等の建設等で、遺跡は大きな影響を受けているのが現状である。

現在、新池の畔北側には、岡山の村川金一氏より土地の提供を受け、昭古文化研究保存会の手により、「更良岡山遺跡」の標石が建てられ、遺跡保存の必要を訴えている。

米つくりの里

弥生の時代

約七千年にわたる縄文時代の後に、わが国の文化は弥生（やよい）時代へと移行する。弥生時代とは、今から約一千三百年前頃から、一千七百年前頃までの約六百年間の時代のことである。この六百年を、およそ三つの時代に細分して、前期・中期・後期としている。別に近畿地方では、奈良県の唐古（からこ）の遺跡から出土した土器を標準として、第一様式から第五様式の五つに区分し、その時期をあらわしている。

縄文時代という名は、その土器の表面に、色々の縄目の文様をつけていたところからとった時代の名称であったが、弥生時代の名は、明治十七年に、東京都文京区の弥生町の遺跡から出土した土器が、今までの縄文の頃のものではなく、また後の土師器（はじき）でもないものであり、この時代の特徴を示すものであったことから、この土器の出土地の地名をとり、弥生式土器とよび、この種類の土器が使用されていた時代を弥生時代とよぶようになったのである。狩猟を中心として生活していた縄文の時代と異なり、この時代は、はじめてわが国に稲を植え育てる生活、すなわち米つくりの生活が開始された時代なのである。稲はもともと南方を原産地とするものであるが、それが大陸を通り、あるいは南方より直接にわが国に入り、まず九州、そして瀬戸内、近畿と漸次東へ移つていったものと思われる。九州の板付、近畿の唐古、静岡の登呂の弥生時代の大きな遺跡は、この時代の代表的な遺跡として知られている。

稲を育てるためには、ある程度の広さをもつ平坦な土地と水がどうしても必要である。今まで山すその安定した土

地に住居をもち、狩を中心とした生活をしていた人々は、耕作のために思い切ってこの住居地を離れ、条件のよい低地にその住居を移していった。かつて、大東市寺川の開電東大阪変電所（海拔六メートル）の建設工事が行なわれた際、この土地の地下約二メートルから、当時の人たちが生活していた住居跡の黒い層の中から、多量の土器、石器、獸骨で作った道具、あるいは木製のすき、鍬などが出土した。

私もこの調査に参加し、当時の様子をこの日で見、この手でたしかめることができたが、ここは弥生時代前期を中心とした大きな村のあとであった。

北河内地方の弥生時代の遺跡をじらべてみると、縄文の時代にくらべて数多くの遺跡が発見されている。前期の東大阪変電所はこの時期で一番古く、中期にはいると住居はやや高台に移り、寝屋川市の太糞遺跡、枚方市の田口山遺跡はこの時期の代表的なものである。後期になると遺跡は数多く発見されており、枚方市の鷹塚山遺跡をはじめ藤田山遺跡など枚方市、交野市、寝屋川市、大東市の各遺跡は、この時代の研究に大きな手がかりを残している。

北河内の遺跡の分布をながめてみると、わが四條畠市が空旷であることにお気づきになつたであろう。事実いまでは当市での弥生遺跡は発見されていない。当時は、大東市とほぼ同じ地理的条件にあつたはずであり、弥生時代の遺跡はかならず四條畠市のどこかの地下にあるはずである。

木の葉をのこした土器

かつて、市の水道局建設工事の折に、敷地の東端から土器の破片が出たとの話をきいたので、早速現地の調査をした。この場所は、東側上手から土砂が多量に流れ込んだ模様で、腐蝕土の中から土師器（はじき）や須恵器（すえき）、瓦器（がき）あるいは江戸時代中頃以降に使用された器の破片などが入りまじつた形で出土していた。

その後、同じ場所から中野正法寺の住職の佐藤さんが、一個の土器の底の部分を採集され、私の手元にとどけてく

ださつた。これは弥生時代後期のはじめ頃のものと思われ、僅か一片ではあるが上手から流入したもので、この地点より東に弥生遺跡の存在を想像させるものである。

土器の底部の直径は、約七厘米、図はその底部の拓本であるが、中央に中心となる木の葉の葉脈がとおり、左右にはたがいに葉脈がのびているのがよくわかる。割合に大きな葉樹の葉のあとがしつかりと残されている。一体、この葉のあとはどのようなことからつけられたのであろうかと、色々と想像していくこともまた楽しいことであろう。

土器のつくり方については以前にも記した通り、まき上げ法、輪づみ法等があるが、いずれにしても形をつくってゆく過程で、底部は製作の基本となるものである。ところが、この弥生時代にはまだ土器の成形に必要なろくろは発



土器底部

明されていなかつた。したがつて、底部をいためないために、また土器を都合よく回転させるために、木の葉をしいて脇部や口縁部の成形をしたものであらう。当然この底部には、木の葉の姿がそのままくい込み、そしてその姿のまま焼き上げられたものである。

この一片の上器の底部は、千八百年前の木の葉が今に土器面に姿をとどめているばかりでなく、弥生時代の土器製作の模様を、私たちに説明してくれる貴重な資料といえよう。

原始の人々の祈り

国道一六三号線を東に、上清流を経て急坂をのぼつて行くと逢坂に入る。逢坂の家並のみえるカーブをまがりきり、約百米を行くと、道の左側、小川にそつたところに、大きな二つの岩を見ることができる。この岩かけには、石の行者が像が安置され、花を供え札拝されている。



逢阪原始信仰遺跡

山の一部から露出しているこの二つの大岩をよく観察すると、女性をあらわしていることに気づく。これは、大昔原始の人々の自然に対する信仰の一つかあらわす遺跡として、当市ではただ一つのものである。

北河内地方で、この種のものをみてみると、枚方市總谷の三ノ宮のご神体が女性をあらわす大きな三角形の二つの石をなべたもので、本殿の社はなく拜殿のみがあり、原始時代以降信仰されていることを物語っている。交野市森の須弥寺の境内には、約一米の男性をあらわす石があり、天の川をへだてて釈尊寺の境内にも、これと同じく石をつみ重ねた遺跡がある。

原始の人たちが、自然物を崇拜した遺跡は東西を通じ存在するが、太陽をあがめ、山そのものを崇拜した（大和三輪山のことき）ことと共に、自分たちの生存に対する祈りと感謝、子孫の繁栄をねがい祈る心情が、直接男女性器をあらわす自然の岩を対象としたことがうかがわれ、逢阪のこの遺跡は、その信仰の対象であったのである。

これらの遺跡と、原始時代の村落との関係をみると、积

尊寺にはその近くに弥生時代の遺跡があり、交野市森の須
弥寺の南西に同じく弥生時代の遺跡、また穂谷三ノ宮の近
くには縄文時代の遺跡がある。このことから考へると、当
市逢阪のこの遺跡と関連する遺跡は現在のところみつかっ
ていないがどうしてであろうか。またこの遺跡が跡にある
ことの意味はどういうことであろうか。あるいは逢阪地区
に高地性の弥生遺跡があるのでなかろうか。

このことは、逢阪の発祥にもつながる一つの問題として
みて見る必要があろう。と同時に、この位置が大和・河内
の重要な交通路としての消滻街道の峠の場所として興味深
い課題を見出するのである。

古墳築造のころ

古墳の時代

幾千年もの、ながい縄文時代の後に、大陸から鉄と稻作の文化が九州に入り、それが東へ広がって、弥生時代となる。この初期の農耕文化がひらけるにつれ、米の生産はだんだんと向上する。その中で、村の生活にも、様々な変化が起つた。やがてその中から能効者は、生産の指導と共に政治的な権力者としてその座をしめるようになる。

耕地の拡張は、権力をひろめる大きな要素となり、村と村の争いにと發展する。やがてそれはさらに統合され、数

多くの国をつくつていった。——弥生時代の終り——（日）本島に百余國、やがてそれは三十國ばかりに統合せられた……中國魏氏倭人伝）。強者は弱者をしたがえ、最後に大和朝廷がわが國を支配することになる。この時期は、およそ四世紀のなば頃であつたろう。

古墳はこの時期から築造され（崇神天皇陵）、やがて最盛期（仁德天皇陵）をへて大化の革新の薄葬令の時期まで続く。この古墳が築造された時期を古墳時代とよび、そのうち四世紀のころを古墳時代の前期、五世紀を中期、六、七世紀前半を後期と区別している。

前期の古墳は、前方後円墳出現の初期のもので、たいていは山すそから長くつきで端の部分を利用し、この景勝の場所を成形し、後円部には棺を納める堅穴（たてあな）状の石室を設け、遺体と共に鏡、玉、鐵製品を陪葬している（岡山・忍ヶ岡古墳）。中期になると古墳の形は大きくなり、平野部に築造され、前期にくらべて埴輪（はにわ）の配列も多くなる（中野・墓の堂古墳）。やがて後期になると、山すそを利用して、数も多く小墳丘をもつ横穴式のものとな

る。

忍岡古墳

昭和九年九月の第一室戸台風は、北河内地方にも猛威をふるい、多くの家屋が倒れる暴風雨であったが、その折、当地の岡山、忍ヶ岡の忍陵神社も倒壊した。その後、この神社の復旧工事が行なわれた昭和十年四月、拝殿の整地作業中、地下から古墳の石室の一部が発見され、これが古墳の主要部分であることが判明した。早速、大阪府の調査が行なわれ、清滝の平尾兵吾先生、京大の梅原末治先生、地元のみなさん方のお手伝いにより、この古墳の全容が明らかにされた。この古墳が、古墳時代前期の前半に位置する忍ヶ岡古墳である。

清滝の北部から西にのびる洪積期の西端の丘陵は、実に景勝の地であり、当然当時の権力者が古墳を築造するのに格好の場所であつたであろうと推察できる地点である。古

墳は北向きの前方後円の形をとり、後円部の丸い墳頂はちょうど社殿の位置にあり、標高約三十六米、後円部の直径は約四十五米、高さは約六米である。前方部は大正寺の鐘楼までのび、後円部の南端から前方部の北端までの長さは約八十七米あり、大和朝廷がわが国を統一しはじめる時期にあたる古墳として、まことに立派な古墳である。

この古墳の後円部にある旧拝殿の下の石室は、底に粘土をかたくしきつめ、まわりには厚く砂利



忍ヶ岡古墳遠望



石室内部

をしき排水の装置をし、その上に幅約一米、長さ六米をこえる豊穴（とよあな）をつくり、側面は割石でていねいに積み重ねられ、天井部には大きな割石をもってこれを覆っているものであつた。内部の側面ならびに粘土床には朱の附着がみられた。死者を木棺に入れ、多くの副葬品と共に葬った様子がよくうかがうことができる。

幸に、地元の方々の努力で、この石室の上は、覆いの家屋が建てられ、その後の風化や損壊を保護されたため、今も当時の模様を目前にみることができるのであって、当市ののみならず、北河内地方でも貴重な史跡であると共に、学術的にも重要な古墳なのである。

戦前に歴史を学ばれた方は、三種の神器として、鏡（やたのかがみ）劍（あめのむらくものつるぎ）玉（やさかにのまがたま）の話や、天照大神の岩戸がくれの神話の中で、櫛に鏡をかざり、神々の首には勾玉の首飾りがあり、腰には立派な劍がおさめされていた絵などを想起されるであろう。

大和朝廷成立のころの古い古墳からは、このような鏡（中

國より渡來のもの「劍、勾玉、管玉」などが出土している。

これは古墳の主、すなわち当時の権力者が身近かに大切にしてきた宝器類であり、また身につけていた品々であった。これらの副葬品は、内容や數の比較により、当時の生活や信仰、団の様子を知る大切な資料となるのである。近くの枚方市藤田山古墳からは、神と獸をくみあわせた文様の中田の妙見山古墳からは、美しい小型のヒスイの勾玉が、碧玉（青めのう）製の管玉、小さなガラス玉と共に出土している。

さて、當市忍岡古墳の場合はどうであったであろうか。

昭和十一年五月、當時調査担当の梅原教授の報告書には次の品々があげられている。石劍（いしくしろ）破片一個、紡錘車（ぼうすいしゃ）六個、鍼形石（くわがたいし）一括、剣破片二口分、斧二種三個、刀子（とうす）一口、鐵破片、小札數口、となつており、石劍は鍼形石と共に腕輪として使用され、紡錘車は糸つむぎの道具、刀子は小刀、剣その他は當時の武具である。

ここで残念なことは、この調査以前に何者かによつて盗掘され、目ぼしいものはすべて持ち去られていたことである。当然、これだけの大規模な古墳であれば、さきにのべた鏡類、玉類も数多く副葬されていたはずで、これらから多くの学術的資料を得ると共に、当時の岡山の事情も多く知り得たであろうと思うと誠に残念である。

墓の堂古墳

忍岡古墳が築造された古墳時代の前期をすぎた頃からは、権力者の力は一層拡大し、また土木技術等も進歩し、したがつて古墳の規模も拡大され、場所も今までの丘陵や、山の尾根から平野部へと移る。この時期を古墳時代の中期（五世紀のころ）とよんでいる。この時代の古墳の最大級のものは、応神天皇陵、仁德天皇陵である。そしてこの時期に相当する古墳としてわが四條畷市では、墓の堂古墳を見出しができる。

墓の堂古墳は、現在中野地区の共同墓地となっている場所で、国道一六三号線、四條畷小学校南の交叉点より南約百五十米、旧東高野街道の東に接する所にある。現在は、住宅、工場が建ち、容易に古墳と判別しにくくまでに変化しているが、墓地の西側に立ち、この状況を観察すると、漸く古墳の状況を判別し得ることができる。中野の墓地がこの古墳の主要部分、すなわち後円部であるらしく、前方部は東にのび東高野街道まであつたものと思われ、主軸はほぼ東西に約百二十米前後と推定することができる。小字に塙脇の地名が残つていてこと、以前に埴輪が出たという話があり、現に、過日の関電送電線鉄塔工事の折にも、その土中から円筒の埴輪破片が出土した。また墓地中央最高所の老樹の下に大きな石があるという言い伝えもあり、旧東高野街道がまるくこの墓地を迂回している様子から察して、この部分が古墳主要部にまちがいないものと推察できる。

現在、古墳と見わけられる所としては、墓地西側からみる地形がわずかにそれと伺われる程度で、周濠（ほり）も



墓の堂古墳

あつたと考えられるが、確認することはできない。ともあれ、本市において古墳時代中期の前方後円墳は、この墓の堂古墳のみであり、大切な史跡である。

石棺



国中神社境内石棺の蓋

応神・仁德陵のような大規模の古墳が出現する古墳時代中期の頃がすぎると、各地で小豪族が自分の墳墓をつくるようになる。前期には山頂あるいは丘陵の高所につくられ



正法寺境内石棺

ていたものが、中期には平野部にうつり、後期にはいると山腹または山すそに築造される。古墳の形も前方後円のものが姿を消し、円墳を中心とするものに移る。そしてほとんど横穴式の石室をもつようになる。石室は遺体の安置される玄室（げんしつ）と、それに通じる羨道（せんどう）とに分かれ、石組で部屋を作り、玄室には、石棺または本棺に遺体を入れ、武器や生活の道具類を副葬している。

この時期には、山腹、山すそに数基以上まとまって築造される傾向となり、古墳群とよばれる状況を呈することが多い。東大阪市の山畑古墳群、大東市寺川古墳群、交野市の寺古墳群、倉治古墳群がその例である。

う。当市におけるこの時期のものは、畠中古墳、黒石古墳（清滝）、双子塚古墳（清滝）と思われるが、現在いずれも完全になくなってしまっており、詳細は一切わからぬのが残念である。

遺物として現在残されているのは、中野正法寺境内にある石棺の身にあたる部分、国中神社境内にある蓋の部分である。いいつたえでは、清滝の旧正法寺北東部にあった双子塚から出土したものだといわれている。棺身は、凝灰岩をくりぬいたもので、その後の加工は、余り加えられておらずよく保存されている。棺の蓋の部分は、国中神社参道入口にある板碑で、棺身と同じく凝灰岩である。上部は後に加工され板碑となつたもので、線影りの仏像の姿がうかがわれる。裏側を見ると、家型石棺の様子をよくうかがうことができる。大きさ等検討すると、正法寺の棺の身の部分、國中神社の蓋の部分をくみあわせると、一組の家型石棺となりそろうである。現存する古墳時代後期初頭のこの石棺は、当市にとつては貴重な文化財であることを紹介したい。

漢式土器



漢式土器

縄文・弥生の時代に製作された土器は、黒褐色、褐色、茶褐色の所謂素焼（すやき）の器で、地面に穴を掘り、土器をならべ、周囲から薪で焼きあげる平かまで焼かれたも

のである。これの焼きあがりの温度は、せいぜい八百度までであって、この器に水を入れると、水はしみ込みにじみだしてくる。後にこの焼き方はそのまま受けつがれ、土師器（はじき）として古墳時代を通じて後にも続くのである。

四世紀、わが国の古代国家（大和朝廷）が成立し、四世

紀後半には朝鮮半島で、高句麗、百濟、新羅の三つの国があり、大和朝廷は朝鮮半島に兵を出し、任那を領土として日本府をおき、百濟をしたがえて高句麗と戦った。この頃から先進の大陸文化を百濟からさかんに取り入れることとなり、技術をもつた百濟の人々はわが国に招かれ帰化することとなる。

当然、新しい器をつくる技術が導入された。所謂のぱりがまの登場である。丘陵の傾斜面を利用し、段をつくって器をならべ、粘土でおおい下方から火を入れると、かまの温度は千三百度ほどになり、粘土内の鉄分は酸素と分離し、ねずみ色の非常にかたい器となつて焼きあがる。このようにして焼きあげた器を須恵器（すえき）とよんでいる。

写真のこの壺は、四條畷小学校のアーチ建設工事中に、

地下から出土したもので、高さ三十二厘米、胴部直径三十一厘米の立派な須恵器である。ところが、この壺は、わが国で製作されたものでなく、朝鮮半島で製作され、わが国に渡來したもので、特に漢式土器とよばれるものである（帝塚山大、堅田氏指摘）。近畿で現存する数個しかないものの一つであることがわかった。先にのべた須恵器製作技術がわが国に導入されるころに、わが国に渡來したものではないかということである。

暇小の浄化槽上事の折に、須恵器、土師器を包む黒い層が地下一米を中心として検出されており、また、講堂、校地東の部分からも土器の出土が見られることから、暇小を中心とした地域は、古墳時代から後の時代にかけての住居の跡であったとも推定することができる。

この大陸から渡來した壺は、一体いかなる人の手から手に、どのような経路でこの四條畷の小学校遺跡まではこばれてきたのであろうか。壺を前にしてつきない興味を覚えるのである。

白鳳の甍

—正法寺址—

单辨の軒丸瓦

四條畷小学校の北側を東西に流れる清滝川を渡り、そのまま高台に出ると、東に飯盛山から清滝の山々、西に木市の平地部から門真、守口、そして淀川の川すじ北側の轟中、池田、はるかに六甲、北摂の山々を一望におさめることができる。この景勝の高台一帯は、地籍にも正法寺とあり、跡なのである。

現在、中野の正法寺の前身である大きな寺院が建っていた昭和六年に発行された平尾兵吾先生著の「北河内都史蹟史話」の中にもこのことが記されており、寺域も広く、壯

麗な大伽藍が整っていたであろうと紹介されている。また後になつては、江谷寛氏により詳細な調査結果と考証の論文があり、昭和四十四年打上より一六三号線に至るバイパス予定路線がこの寺域を通るために、大阪府教育委員会の手で発掘調査が行なわれ、その結果、正法寺の創建と歴史について明らかにされた。その後、瀬川芳則氏による論文も古文化シリーズとして市教委より発刊された。

清滝の矢島次朗氏は、以前からこの寺院について関心深く、折ある毎に寺域を歩き、当寺院の歴史を物語る貴重な瓦類を探集され、調査に大きな貢献をしてくださった。また掲載の写真は、清滝の小倉昇三氏所蔵の軒丸瓦で、同氏夫人が田を耕やしておられた折、偶然に足にふれたのがこの瓦で、当寺院創建の年代を決定づける貴重な資料となつてゐる。

欽明天皇五五二年、わが国に仏教がもたらされ、蘇我、物部両氏が仏教をとりまく争いの後、蘇我氏の勢力拡大、聖德太子の仏法崇敬といった過程をたどり、仏教は急速に広まり、太子により法隆寺、四天王寺が建立される飛鳥時



創建時の軒丸瓦

のはじめ頃に建立されたものとみるべきであろう。とすれば、すでに当地方には、これだけの寺院建立をする基礎が、この時期にできていたと見るべきで、近くの讃良寺とも考えあわせ、この清滝山麓にはすでに白鳳時代に文化の花が咲きはじめていたことを、事実をもつてうかがうことがであります。

礎 石

すでに廢寺となつた昔の寺院の姿を復元するためには、色々の角度から考証し、その歴史を解明してゆかねばならないが、その作業の中で特に重要な要素をもつものに、寺院の立地条件、ならびに礎石の配列、出土する瓦の分類がある。

さきの正法寺軒丸瓦は、この寺院最古のもので、創建当初の瓦と考えられる。卑弁のこの丸瓦は飛鳥時代の様式を備えている点から、当寺院は飛鳥時代の終りから白鳳時代である。

飛鳥・白鳳・天平の各時代に建立された古代の寺院は、いずれも見晴しのよい台地の平坦部、あるいはそれに準ずる平地の住居としても好適の場所に選定されている。北河



国中神社鳥居前の礎石

内地方の古代の寺院である中宮の百濟寺、郡津の長宝寺、倉治の開元寺、高宮の高宮廃寺、諱良寺など、いずれもこの条件にあてはまる。正法寺もまさにこの条件をそなえる場所にあり、東に清滝の山、西に平地を見下ろし、平坦高燥の好適地に立地している。

寺跡に立つて田の畦を観察すると、上段と下段の間に、大きな石が三個その姿を見せていて、一面だけしか観察で

きないが、いずれも加工の跡があり、おそらく創建時の礎石であろうと推定することができる。また国中神社鳥居の両脚の外側に三個の石が置かれているが、この石は寺跡から移したものと伝えられ、加工の様子からこの寺院の礎石に間違いないものと推定する。

三重の塔

それでは、先年発掘調査された府教委の報告書により、当寺院が創建された白鳳時代の伽藍配置を紹介し、またその後の正法寺の推移について簡単にふれ、まとめてみたい。

主な伽藍は、この地域東西、南北とも約百米の中におさまる、南から南大門、中門、東西の塔、金堂、講堂とならび、整然としたその配置と建物の偉容は、清滝の山を東に、また清滝川を南にして、まことに莊麗なものであったであろう。現在、午塚とよばれ正法寺の説明標柱のある土壇は、今回の調査により中門の跡と推定されている。したがって

この位置に立ち岡の配置を重ねていただければ、鳥有となり、僅に三重の塔のみ尚存」とあり、おそらくこの寺院も南朝方となり戦乱の渦中に入らざるを得なかつたのであろう。やがて小楠公職死の四條畷の戦を終止符として衰退してしまつたのであろう。出土した瓦類からもこのことが指摘されている。その後、年を経て天文年間に觀海上人が堂宇を再建したが、大阪の陣で焼亡、遂にこの地にその堂塔は建つことがなかつた。その後、圓明上人が中野の現在地に正法寺を建立し、その法灯がつがれ、現在に至つている。

焼亡後の寺跡には、石造物のみが残り、その内の十三重の石塔は、枚方市長尾の正俊寺境内にあり大阪府の重要な文化財に指定されている。また、同寺の本尊、黒仏といわれる釈迦如来座像も、この地より移されたもので、平安時代後期の立派な仏像である。

南北朝時代にいたるまでの間、存続していたことが裏付けられる。「正法寺縁起」には、「元弘、建



正法寺跡（礎石がみえる）

武の兵火に遇つて衆僧悉く退散しぬ。其の後堂閣僧坊悉く鳥有となり、僅に三重の塔のみ尚存」とあり、おそらくこの寺院も南朝方となり戦乱の渦中に入らざるを得なかつたのであろう。やがて小楠公職死の四條畷の戦を終止符として衰退してしまつたのであろう。出土した瓦類からもこのことが指摘されている。その後、年を経て天文年間に觀海上人が堂宇を再建したが、大阪の陣で焼亡、遂にこの地にその堂塔は建つことがなかつた。その後、圓明上人が中野の現在地に正法寺を建立し、その法灯がつがれ、現在に至つている。

焼亡後の寺跡には、石造物のみが残り、その内の十三重の石塔は、枚方市長尾の正俊寺境内にあり大阪府の重要な文化財に指定されている。また、同寺の本尊、黒仏といわれる釈迦如来座像も、この地より移されたもので、平安時代後期の立派な仏像である。

奈良時代、清瀧川の清流の前に東西の両塔がそびえ、立派な金堂、講堂が建ちならぶ古い正法寺の姿を改めて想像しつつ、春・秋のひとときをこの寺跡をたずねていただければ誠に幸である。

まぼろしの寺々

讃良寺

岡山新池北岸のほとりでの縄文遺跡調査の折に、たまたま古代の瓦数片を発見した。この場所、すなわち新池北岸から、北の寝屋川市国守町にかけての古地南面の一帯には、大きな古代の寺院があつて、これが讃良寺の跡であるということは、以前から府文化財専門委員の藤沢先生より聞いていたことであり、この瓦片も当然讃良寺のものであると判断し慎重に調査を進めた。

数片の瓦に統いて、地表より約二十㌢下から、巾六十㌢、奥行三米の瓦の破片をしきつめた遺構が現われ、その末端

には、大きな平瓦二枚を合わせて、水がぬけるような装置になっていた。合わせた二枚の瓦の尖端部分からは何の遺物も発見されず、土の色、質も他と余り変化が見られない点からみて、雨水をぬいていた装置とも考えられる。この瓦片の中から、屋根の軒先に使う軒丸瓦が発見された。軒先に使うこの丸瓦は、蓮の花の模様で複弁（はなびらが二重）になっており、八つの弁をもち、中央の中房といわれ



讃良寺跡出土軒丸瓦

る部分には $1+4+8$ の蓮子を配しており、また軒平瓦は三重の孤文となっている。この種類の瓦は、大和飛鳥地方にある有名な川原寺に使用している瓦と、系列を同じくするものであった。したがって、これらの瓦からみてこの讃良寺は、奈良時代前期にあたる白鳳時代に創建された古い寺院であつたと推定することができる。

河内国讃良郡というものは、山家、甲可、牧岡、高宮の五つの郷からなり、南は大東市中垣内より北、野崎、北条、四條畷市の大部分、寝屋川市国守町、小路、高宮にいたる範囲であつたと推測される。したがってこの寺院の位置は、讃良郡の北部によつた高台に建立されたといつてよい。

佛教が伝来して間もないこの白鳳の時代には、各地方の豪族が自らの氏寺として寺院を建立しはじめる。この讃良寺は、多分、讃良郡の郡司、すなわち郡の長官が建立したもので、その名も讃良郡の名をとつて讃良寺としているのではないかと、藤沢先生が寝屋川市誌にのべておられる。

この讃良寺に関するくわしい記録はのこつていない。ただこの寺院の後身が大正寺であると伝えられているのみで、

今後の発掘調査により、まほろしの讃良寺の遺構の一部でも見出すことができたらと期待するのみである。

小松寺

一六三号線を東に急坂をのぼりつめ、達坂の峰を越えて下り坂にかかるところを左に折れると、四條畷ゴルフ場へと入る。このあたり一帯は、なだらかな高原となつており、空氣も澄み誠に美しい景観である。

すでにその面影を全くなくしてしまった山岳寺院の小松寺の跡は、このゴルフ場本部建物より北四百米、交野市星田の妙見川すじを山に登りつめたあたり一帯であつたと推定されている。

今から二十数年も前のことであつたろうか、交野市史編さんのために、この寺跡をたずねたことがあつたが、標高二百六十米のこの高原をおもわせる古地上には、段々にけずった平坦地が点々とあり、台地上には礎石の一剖が露出



小松寺跡出土軒丸瓦

しており、一部掘りとられたところからは、瓦も出土していたことを記憶している。

この小松寺に関する古文書には、平安時代の終りごろに書かれた「小松寺縁起」が残されている。

むかし、このあたり一帯は、木も生えておらず、白い岩の山が続き、神秘な場所のように思われていた。ある日、田原の村の少年三人が、この地にやってきて、小さな草ぶきの家をつくり、星田郷から拾ってきた青い石を刻んで仏像をつくり、おまつりしたのがこの小松寺であると縁起に記されている。

縁起は、さらにこの寺院の最盛期の模様をくわしく伝えている。すなわち、宗旨は真言宗・東寺派。金堂の本尊は弥勒菩薩、根本堂には十一面観音、建物は、金堂、根本草堂の外に講堂、三重の塔、鐘楼、經藏、宝蔵、食堂、西の大門、北の小門、毘沙門堂等、坊舍六十七宇、僧衆百二十八人、児童三十八人、と誠に大規模な寺院であった。

この縁起が書き残される時期、すなわち平安末期のころは、先に記したような小松寺の最盛期とみてほほ間違いあ

るまいと思われる。縁起は、時代的なすれをもつてゐるが、創建は多分、弘法・伝教大師が中国から帰朝し、わが国に密教をもたらし、山岳に寺院を建立（高野山・比叡山）され、密教がひろまつた頃に、この白い岩肌の高原を靈地として、真言宗を信仰する人によつて建立されたものであろうと思われる。そしてこの縁起に示すような最盛期をへて、やがて鎌倉・室町の時代にいたり、当時戦乱の中で一つの城砦としての機能を果しつつ衰微の一途をたどつたのである。

千 畳 敷

岡山の家並をはなれ、讃良川ぞいに東の山に登つて行く。かな平坦地に出る。この平坦地を右に折れ段々と小さな台地から右側の山の尾根に登る。この尾根は相当広く平坦地として整地の跡が見られ、上、中、下段とそれぞれ自然石を使つた石垣の部分が見える。この台上から西は、眼下に四條畷の市街、遠く河内、攝津を一眺することができる。急流となり、それに伴つて道も急坂となる。登りつめたところを左に折れ、流れにそつて奥へたどると、左はなだら



十三重塔(一部が谷間に転落していた)



千 畳 敷（昭和40年頃）

の情景は、かつて十年前にこの台上に立った時の記憶であるが、この一帯が昔から千畳敷とよばれている寺院跡なのであつた。

下の小台地からは、中世（鎌倉末から室町か）の瓦片、香爐破片、燈明皿、瓦器片等が出土しており、また谷には、石造の十三重の塔の一部と思われるものも姿を見せていた。この地形と出土遺物から、この場所は間違いなく中世の山岳寺院の跡であろうと推測される。讃良川沿いの古い道に接して、相当規模の寺院であつたであろうと思われる。

この位置は前記の小松寺とも近く、或は小松寺との関連を想像することができるが、やはり独立した寺院であつたとする方が当を得ていると思われる。私はかつて交野山の中腹から山頂にかけて所在した開元寺の調査に参加したことがあつたが、山腹に小平地を数多く造り、頂上近くには大きな平坦地を用意して、そこに堂塔を造営しており、礎石や焼けた仏像の破片には金箔も残り、当時の生活用具も数多く見出すことができた。また鐵の鎌もあり城砦としての要素をも兼ねそなえていたと推測したものであつた。こ



千疊敷跡（昭和49年）

の千疊敷も、交野の開元寺とよくにた要素と構造をもつて
いたことであろう。

十年後、この地をおとされたところ、かつての山も、谷
川も今はなく、この千疊敷一帯は土砂採取により完全にそ
の姿を消滅していた。わずかに残る北側の一部の山はだに
礎石一個と、土器片を含むうすい層のみが見られるだけで、
在りし日のこの山岳寺院は、空にかかる虹の消えゆくこと
はなく、まばろしの千疊敷とするのみとなってしま
っていた。

みちしるべ

東高野街道

「古い道」、「みちしるべ」これらのことばは、現代の私たちにとって、たしかに郷愁をさそうことばである。道ばたにはタンボボの花が咲き、花をたずねて蝶の舞う野辺の道、そして辻の片隅にかたむいた石のみちしるべ……；急速に都市化の進む北河内では、もうこんな風景をみるところはごくわずかとなってしまった。

私たちの町、四條畷市に關係ある古い道すじは、まず、

東高野街道、そして清滝街道・古堤街道・磐船街道である。それでは東高野街道についてしらべてみるとよい。

江戸時代中期に大和川が堺につけかえされるまでは、生駒山のふもとは大へん低く、大和川・石川・寝屋川・古川その他の河川の水はここにあつまり、新開池・深野池とよばれる大きな沼沢であった。したがって、飯盛山とこの深野池の間を通る道は、古くから重要な道としてひらかれていた。

古代の河内国の中心である国府は、大和川が平地に出る所にあたるところにあつた（柏原の国分）。これに至る道



として東の山すそを南に向ってのびる道、山の根の道、
があつた。その後、平安時代に弘法大師が高野山を開かれ
て以来、この道は整備され、京都の東寺から高野山に至る
東高野街道となり、河内南北の重要な道路として役割を
はたしてきた。

父野から南下してきたこの東高野街道は、寝屋川市打上
を通り、当市岡山のトンボ池西から旧正法寺の寺域の西へ
出て南にまがり清滝街道と交わり、山内医院西から南へ、
中野の墓地の前から和田賢秀墓地、そのまま南下して大東
市に入る。本市で現在一番面影が残っている部分は、清滝
街道との交叉点から南、中野墓地——和田賢秀墓地の間で、
道路巾はせまいけれどもこの部分はそのまま東高野街道の
旧跡として保存しておきたい「古い道」である。この古い
道、東高野街道は、何百年ものあいだ幾多の人々の哀歎を
みてきたことであろう。

本市を南北にはしる古い道、東高野街道に交叉して東西
にはしる道に清滝街道がある。

生駒の山系は、河内と大和との境界線となつて南北にの
びているため、河内から大和への交通路はどうしてもこの
山系をよこぎらねばならない。これらの道は、当然のこと
ながら山から流れ出る川ぞいにそつて谷間をのぼり、峠を
こえて人和へと通じている。このうち本市に関係する道は、
北から父野市を流れる天野川沿いの櫛船街道、市の中央部
と達坂——田原へと通じる清滝街道、そして大東市寺川か
ら田原へ通じる古堤街道がある。

現在、市の中央部を東西に横断する道路は、国道・六二
号線であるが、これは旧の清滝街道とはほぼ平行してはしつ
ているのである。この清滝街道は、昔は「清滝峠越え大和
街道」または「大坂越え」とよばれ、古代から重要な交通

清滝街道

路であつたと、つかがうことができる。

この清滝峠越えには、逢阪にいたるまで二つの道があつた。一つは岡山から讃良川の上流に沿つて山間に入り、それから逢阪に出る道と、今一つは中野から清滝、上清滝、逢阪に出る道である。

岡山の地は、古代の大和朝廷の持統天皇とも深い関係のある地と推定されるところから、岡山——逢阪——田原の道は古く開発されたと見ることができる。また、この道すじの山には「千畳敷」とよばれる中世の寺院跡もあった。



藤屋にある自然石道標

一方中野——清滝——逢阪の道もこれと同じく古くから開発されたものと思われる。この道の北側、四條畷小学校北の台地は、古代寺院の正法寺の旧跡があり、遠く白鳳時代から鎌倉時代までの遺構をのこしている。

この二つの道が峠の逢阪で一つにまとまり、東方、田原へとのび、さらに大和へとつながっていた。峠にあたる逢阪も、東西交通のポイントとして歴史の流れの中で、常に大きな役割をはたしてきたといえよう。この清滝街道こそ古代の政治、文化をいち早く当地方にもたらした歴史の道であろう。

みちしるべ

本市を南北に、また東西にはしる古い道として東高野街道・清滝街道についてのべたが、これ以外の古い道として、東高野街道に平行して小楠公墓地、駿高、中野、砂から枚方に至る河内街道がある。これは江戸時代、枚方道とよば

れていた街道である。また中垣内から東の山に入り上田原に至り、大和籠田に続く古堤街道がある。さらに岡山、砂

を結ぶ東西の道、小楠公墓地北を通る雁屋の道や、権現川

筋の道なども本市にとては古い道すじである。

これらの古い道すじの分岐点、あるいはその付近に今なお当時の道案内である石の道標がそのまま残されており、

私たちに昔の話を語りかけてくれるような気がする。本市

で一番古い時期の道標は、萬屋の西、堀溝との境界にたつ

自然石の道標であろう。



東中野道標

これより東清滝
やはたみちすじ

延宝乙卯年七月五日

と刻まれ、ここが清滝街道の起点となるところであろう。
道はこれより萬屋の中を通り西中野に至つて東高野街道と
交叉する。農協東の道標には

右 清滝街道

すぐ高野街道

と刻まれている。上清滝には久門善雄氏が大切に保存の
手をうつておられる

左 あう坂
なら道

右 いいせが きつ 郡山 の自然石道標がある。

下田原には

右 なら郡山道

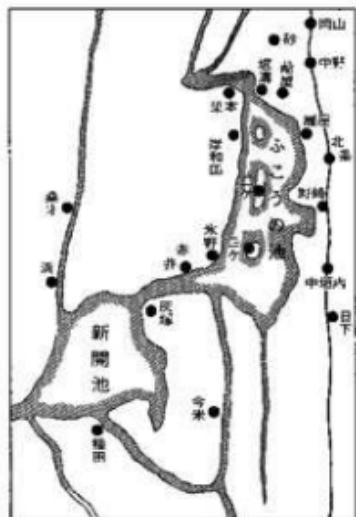
左 やましろ 弘化・一戊午七月 の道標がある。

砂、上田原にもそれぞれ河内街道、古堤街道の道標を見る
ことができる。地図の上に記号を入れながら道標をたど
る行脚も、また楽しい市内の歴史散歩の一日となるであ
う。

あし辺の物語

二上山を境として、北にのびる生駒山を主峰とする山系は、その西側は急斜面となつて河内平野にのぞんでいる。また、大阪城をその北端とする上町台地は、河内平野の西をかこむように南北に高台を形成している。この生駒山系と、上町台地の間の河内平野は、特に山麓直下で一番低くなつておき、太古から江戸時代中期に至るまでは大きな沼沢となつていた。今の大和川は、石川とともに北に流れてこの低地に水をそいでいた。古川、寝屋川、そして生駒山系の水もすべてこの低地に集まり、一帯の大きな沼沢は、

一つは深野池、一つは新開池と名づけられ、この水は京橋から天満橋をへて大阪湾へと流れていったのである。



深野池古地图

おき共云。三ヶの島に漁家七、八十戸あり。田畠も有。此島南北廿町、東西五、六町有と云。此池に鰐、鯉、鮎はす、わたくか、ゑび、鰯、つかに等多し。漁舟多し。日々舟に乗て漁し、魚を大阪にうる。又蓮多し、芡實多く草多し。皆取用てたすけとす。殊に菱最多し。是を探て飯にし籠にし粥にして根とす。或は菓子にもす。又売て資とす。菱を取日は定日あり。里人云合群出。一人にて取事を禁す。菱に賦税はなし。又此島より漁人其舟にのり陸に渡りて田を作なり。

この文は、江戸中期の深野池周辺の村人の生活を知る貴重な文献である。深野池の東端は大東市中垣内から野崎、雁屋、蓆屋、堀溝と、ほば今の外環状線と合致しているものと予想される。蓆屋、雁屋、堀溝はこの池の岸辺にあり、葦の間に舟をつなぎ、漁をする人も多かつたであろう。ところが、ひとたび大雨が続くと、この低地にそぞぐ大和川をはじめとする各河川は増水し、堤防はきれ、深野池も増水し、池の周辺の村々、河川近くの村々は大きな被害を受けねばならなかつた。寛永十五年（一六三八年）から元禄

十六年（一七〇二年）までの六十五年間に大洪水十五回、小泡瀬の水患は連年のようであつた。

このような状態の中で、中河内の東六郷村今木の庄屋・中甚兵衛は何とかしてこの水患を除くため、治水について調査した結果、大和川を西に付替え、堀に流す方策を立案した。この方針は、幾千年来の水患を一举に解決する雄大なものであるだけに、大きな困難も予想された。命を賭しての中甚兵衛の直訴、反対派の説得等、一十五年の歳月を経て大和川付替工事は、元禄十七年に竣工し、九百町歩にわたる河内低地の干拓事業の幕はひらかれた。その後大阪商人の手により鴻池新田、平野屋新田等が開発され、現在に至つたのである。

深野池にかけをつづす飯盛の城、葦の間にみえる小橋公墓地の樟の木、雁屋、中野、清滝の村々、さては正法寺の伽藍等々、今はなき深野池をめぐって、昔の四條畷の景観を脳裡によみがえらせ、自然と人間のながい歴史に感慨を覚えるのは私一人ではあるまい。

雁

塚



雁 塚

西中野の市消防局の近くに、西征戦死者招魂碑とともに位牌型の石面に、大きく「雁塔」と刻まれた碑がある。これが古くから「雁塚さん」として親しまれてきた石塔である。

室町時代、文明年間のできごとで、中野村の里人が狩に出て、たまたまこの近くの葦原で一羽の雁を見つけ、矢をつがえてこれを射たが、矢に倒れたこの雁をひろいあげたところ、胴体ばかりが残って首がなくなっていた。これは一体どうしたことであろうかと思いつつその日は帰途についた。その後、十日ばかりして同じ場所で、また一羽の雁を射落したのである。そしてその雁を手にとると、その羽の下から、先日射落した雁の首が出てきた。これは、今日の雁とはまぎれもなく雌雄であったと気づいた里人の驚きは大きく、この日以後里人は狩をするのをぶつりとやめ、この地に塔を建て、厚く雁の靈をとむらつたということである。

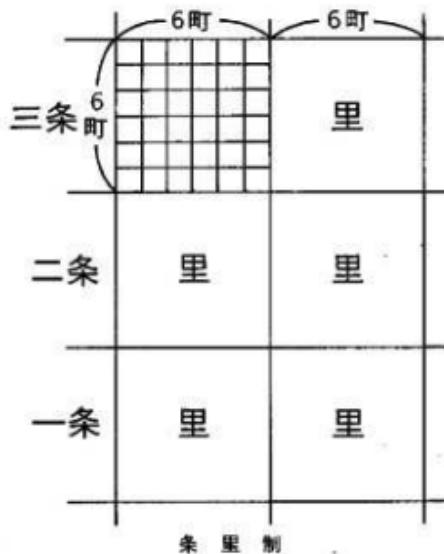
当時は、深野池の葦辺には数多くの水鳥がここをすみかとしていたことであろう。この池で魚をとり、また水鳥をとつた里人たちが、水鳥たちの靈をとむらうためにこの碑を建てたのであると、故平尾兵吾先生はその著「北河内郡史蹟史話」に記しておられる。

現在の碑は、寛延二年に寺尾幸助という人が建てたものであるが、これより百年前にも碑があり、「当初古老傳雁石塔婆也、正保二年六月中野村」と刻まれていたと右著書に出ている。

昔は、子どものはれものに靈験があるといって、よくここに詣る人が多かつたようだ。雁はクサをたべることから、子どものクサをたべてもらうためにとの信仰からであろう。交通量も極めて多いこの西中野の一隅にあって、古くからいのいつたえがこの「雁塔」とともに現在もなお存在し、四條畷の昔を物語っている。

あの溝この道

讃良寺や正法寺がこの地方に建立された奈良時代前期（白鳳時代）は、わが国にとって、はじめて天皇を中心として統一された古代国家が実現した時期であるといふことができる。聖徳太子の理想をうけつがれた中大兄皇子（なか



のおおえのおうじ）は藤原鎌足（かまたり）等と蘇我氏を打倒し、大化の新制令の発布へと進む。大化の革新の基本は、全国の諸豪族が昔から私有していた土地、人民を天皇に直属させ、天皇中心の國家として制度化することであった。

この公地公民の理想を具体的に実施したのが班田吸拔法である。班田とは田を国民に分配することで、生まれて六

歳になると田を授けるわけで、全国民が天皇の田を借り、稲を作りその内から貢をささげるという方法で、このため全國の人々の戸籍や、田の広さをしらべ、六歳以上の男子には田二反、女子にはその三分の一、姫妹には三分の一を与えられた。この田のことを口分田（くぶんでん）という。

このように各人に分けるために、土地の整理が行なわれるのであるが、この区画整理を条里制とよび、条里制が行なわれた土地は、ちょうど基盤の日のようだ整理された形を残している。

まず六町の間隔で（一町は約百米）縦横に直線の道がつけられる。この六町四方の土地を束（り）といい、この里を一町四方にくぎると三十六の区画ができる。この一町四方の上地を坪（つぼ）といい、一の坪から三十六の坪まで数えられる。この坪をさらに十等分したのが一反であって、三百六十歩としている。このようにしてはじめて各人に分けられる田のこまかい区画ができるのである。はやくから耕作がはじまった平地では、全国的にこの条里制の遺構がみられ、当四條畷市の平地部にもこれを見ることができる。

生駒山系の西側の低地は、すでに二承知のようすに早くから稲作が行なわれており、弥生時代から引続いて古墳時代の遺跡の分布を見ても、人口の増加、稻作耕地のひろがりも想像することができる。千三百年前の大規模な耕地整理は、実に大きな作業であったと思われる。

当地方の場合、この低地を中里内を起点として北に一条、三条と數えて、大東市との境界線から北へ南小学校南道路までの間が六条、それより北へ中野と砂、岡山の境界線（東西線）が七条、皆北野とよばれた砂、岡山が八条ということである。四條畷神社参道の三十六、四條畷小学校付近の二坪とよばれる小字は、この当時の地割りである坪の名称をそのまま今日に伝えていく。

田原地区については、天の川流域が耕地であったと思われるが、条里制遺構としての地割りを認めることができない。今日、私たちがあまり関心をもたず歩いている細いあぜ道や、水路が、昔の大切な地割りの基本線としての役目を果してきただことに、ながい人間の歴史のあしあとを改め

で見出すのである。

楠の大树

小楠公墓地

国鉄四條畷駅を下車、北へ百メートルで楠公商店街、商店街を西へ百五十メートル、つきあたるところが小楠公墓地である。

後醍醐天皇を中心とし、楠木正成、新田義貞等によつて鎌倉幕府が崩かいし、世にいう建武の新政が行なわれるのであるが、それもつかの間の平和であり、やがて新政もくずれ、北朝と南朝の勢力争いとなる。これが南北朝時代である。南朝方の重臣、楠木正成が渾川で足利尊氏と戦い戦死してより、次々と南朝の勢力はうすれ、北朝がその実権を手に入れ、時は室町時代へ移つて行くのであるが、この時



楠の大樹

にあって、南朝方最後の將として河内で勢力を保っていたのが、楠木正成の子、楠木正行^{まつゆき}であった。

当時の北朝方はこれを見逃すわけではなく、足利尊氏は、高師直^{たかしのぶ}を將として正行を討つべく京都より南下、正行は、

これを迎え討つべく吉野から東高野街道を北上、ここ四條畷で双方が遭遇し、南朝の命運をかけた決戦が行なわれた。時に正平三年正月五日、今より六百一十余年昔のことである。しかし戦は南軍に利あらずして正行一族は全員討死し、

その遺骸が葬られた場所が現在、墓所とつたえられている在、墓所とつたえられているこの地である。



小楠公墓石

当時は、寒風の吹く戦場のあとに盛土の上に小さな石の墓標を置いただけの墓地であったであろう。ところが、正行戦死後八十二年を経た正長二年のある夜、山城の国人がこの墓地に一本の樟樹を植えたのであるが、その後この樟はすくすくと成長し、小さな墓石をつつみこみ一本とな

つて現在に至っていると伝えられている。

この樟の大樹は、幹の周囲が約八米、樹高二十米、枝のひろがりはこの墓地全域に及んでいる。樹齢約五百五十年。今なお樹勢はさかんであり、市民のみなさんが市の木として樟をえられたのもさこそとうなずかれる。この墓所は大阪府の史跡であり、樟の大樹は、昭和四十六年三月に改めて大阪府の天然記念物に指定された。

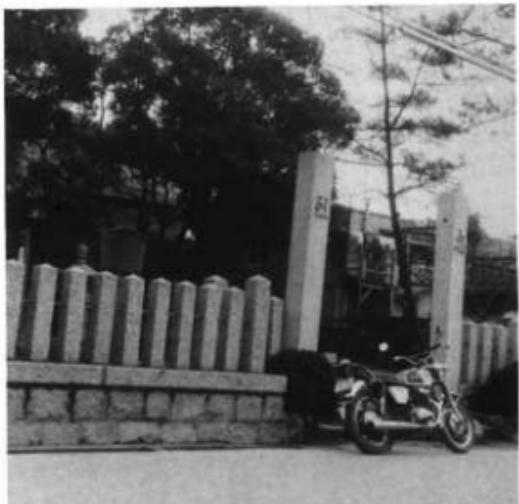
墓地は、明治のはじめまでは今よりうんとせまく、樟の木を中心として顕彰碑一基があつただけであつたが、明治七年、八年の拡張工事で現在見る立派な墓地として保存されてきている。墓碑の「贈従三位橋止行朝臣之墓」の十一文字は大久保利通の筆。

和田賢秀墓地

楠公商店街を東に向い、四條畷神社の第一の鳥居前を左にとり、東高野街道を北に約二百五十米あるくと、右手に

新しい玉垣をめぐらした樟の木の森がある。これが和田賢秀の墓地である。

和田賢秀は、和田源秀ともい、正平三年一月五日、南朝方の将、楠木正行と北朝方の高師直との決戦の日、楠木正行方にあって勇壮な戦死をとげたと伝えられている人で



和田賢秀墓地

ある。

四條畷の戦の終幕に近い頃、和田賢秀は単身、高師直を打たんとして乱軍の中にまぎれて北軍に入り込み、その機会を待っていたのであつたが、その折、北軍方にかつて南軍にいた湯浅本官太郎左衛門という人がおり、たまたま賢秀を発見し、賢秀のうしろよりおそつたのである。賢秀は、この不意打のため、思わず湯浅なる人の顔をはつたとらみつけて果てたのである。

その後湯浅という人は、賢秀の顔が寝てもさめても瞼にうかび一週間を出すして狂い死んだ……と太平記に記されている。

太平記には、楠木正行、和田賢秀の勇壮な戦いぶりが記されており、その墓地は、小楠公墓地とは別に現在地に営まれたようである。

あやからうとの気持がこのよだんな信仰を生んだものと解される。

現在、境内はよく整備され、近隣の人たちの清掃奉仕がつづき、美しく保存されている。墓地中央の土壇には、位牌形の石碑があり、

表に「和田源秀戦死の墓」裏には

「昔とへば

すすき尾花の

あらし吹く

大保二年九月浪花の人水田友之

と刻まれている。

夢のあと

飯盛城址

生駒の嶺が北にのび、それが東北に方向をかえようとす
るところに、急峻な飯盛山がそびえる。標高二百十七米、
その形を北西から見ると、ちょうど飯（いい）を盛った
形に見えるところからこの名がつけられたのであろう。
少年の日に育つた土地の山や川の景観は、その土地での
さまざまな生活とともに、ふるさととしての印象を根深く
心の中に刻みこんでいるものである。四條畷で育つた方々
が、ふるさとを思ひうかべ、話をされる場合、まず脳裡に
うかんでくるものはこの飯盛山のたたずまいであろう。



飯盛城見取図 (山口博氏による)

沢長政にはじまる。その後四国から出た三好長慶は、島山氏と戦い、やがて飯盛城の城主となるのである。長慶はこの飯盛城を本格的な山城とし、勢を近畿一円にふるつた。

飯盛城にとつては、まさに近畿の中心であったのである。長慶がキリスト教を保護し、飯盛にも、大東市三箇の城にも、また砂にも教会をたてたと伝えるのもこの時期であつた。しかし、それもわずかの期間であり、松永氏がこれに代り、やがて織田信長の畿内平定によつてこの城の生命も終るのである。

飯盛山頂に生る道すじでは、所々に当時の石垣が残つており、山頂の部分には、当時の館があつたであろうと思われる平坦地があり、私どもに往時の夢のあとを詰りかけてくれる。山頂部に、また谷間に、そして山すその地には、城に關係する地名が今に伝えられ、近畿でもまれにみる山城としての姿を、三好長慶の名と共に残しているのである。

田原行のバスは、清池、逢坂をすぎ、飯盛山園を左に見て田原盆地へと入る。天の川をわたる手前の信号を右に流れ、上田原の家並の中を通りぬけ古堤街道をしばらく走ると、終点の八の坪に着く。この八の坪で下車すると、正面に約三十米の高さでそばだつ山が田原城址である。 東に田原盆地を一望のもとに見おろし、北は眼下に走る古堤街道をおさえ、周囲を谷と川でめぐらすこの山は、生駒の第一の山脈の西側に突出した部分であり、たくみにこの地形を利用した中世の城であるといえよう。 残念ながら現在は、この城に関する文献はほとんど見当らないが、「城の下」「門口」「土居の内」「的場」「矢の石」など城郭に関連ある地名が残され、また月泉寺にあるこの城の城主と推定される田原対馬守^{（あづまのかみ）}をはじめとする位牌、ならびに月泉寺墓地の五輪塔などが、往昔の田原城の

田原城址



田原城址遠望

規模と歴史を物語ってくれる。

この城は、バス停から山にかかるあたりを「一の門」とし、いわゆる大手となるところであろう。それより急な坂道を登った所、現在数軒の住宅、畑になつてゐるところが「二の門」と推定され、おそらく当時の館もあつたと思われる。

それよりさらに頂上に向うところが「三の門」石段をのぼると頂上の平坦地に至る。住吉大神を分祀しているこの場所が、城の本丸にあるところである。また、本丸の入口をかためる「三の門」から左へ「切り堀」と考えられる溝があり、「井戸が谷」へと続く。「隠し井戸」と呼ばれる井戸があり、非常用の水利と見ることができる。この「切り堀」より西側一帯も「二の丸」としての性格をもち、当時の居館のあつたところと推定されている。

田原対馬守を城主としたこの田原城は、戦国時代の終りに近畿に転をとなえた三好長慶の麾下にあって飯盛城の支城としての機能をはたし、やがて織田信長の統一とともに消滅していくものと思われる。

大坂の陣と忍ヶ岡

見し人を忍の岡の花すすき

なびくはまねく心地こそすれ

待つ人などかたらはではとぎす

一人しのびの岡になくらん

な壁穴の石室を残してい
る、また軍事的に見ても、
極めて重要な位置にあり、
六百年前の小楠公四條畷
の合戦の折にも、北軍の
將、高師直もこの岡に本
陣をかまえたであろうと
想像される。

古人の詠嘆したこの忍ヶ岡は、標高四十米、当市北部の
美しい森として現在まで残された。洪積層のこの岡は、
平地に臨みまことに展望もよく、南西はるかに深野池、南
東に飯盛山、その間の平地を一望におさめることができ、
北は交野ヶ原の丘陵に臨んで景勝の地であるばかりでなく、
古来から京都、河内、大阪に通する交通の要衝でもあつた。
すでにのべたように、今より千六百年前の昔には、この地
方の豪族の古墳がこの頂上に當まれ、北河内地方でも貴重

時は移り、豊臣秀吉の
天下の統一、やがて秀吉
没後、一年余にして天下
分け目の関ヶ原の戦、そ
れは大坂方の敗北となり、
豊臣、徳川はその座をか
わり、秀頼は攝河泉六十
万石の大名としての力し
かもたなくなつてしまつ
た。しかし家康は、この



忍ヶ岡

豊臣方に対し徹底的な攻撃をかけ、秀頼による多くの社寺の修復、その他で財宝の消耗をはかり、終に京都方・広守の鎌銘事件を契機として世にいう大坂冬の陣がおこるのである。慶長十九年（一六一四年）真田幸村、木村重成等の奮戦もなしく和議が成立し、本丸を残し外濠は全部埋立てられてしまい、その上、家康の衛中にはまつた大坂方は、翌年徳川方との戦に入り、豊臣方が決定的に潰滅する大坂夏の陣がはじまるのである。

京都に集結した家康の大軍は、大和路と河内路の二つに分れ、河内路には家康、秀忠が共に京都を出発し東高野街道を南下、六万の先鋒につづき、家康一万、秀忠一万五千の軍勢で大坂めざして押しよせたのである。五月三日、家康は星田に本陣をおき、秀忠は岡山の郷上、高橋孫兵衛宅を本陣とし、この忍ヶ岡はその戦闘指揮所となる。高橋孫兵衛は命をうけてこの岡に土壘を設け、一丈五尺の高橋を作り秀忠を迎える。五月六日、大坂方との戦においては、この岡山の指揮所がいよいよその中心として活躍する。戦闘の指揮、また大坂方武将の首実検もこの地で行なわれた

と記録は伝えている。六日夕刻には、秀忠は東大阪の方へ移動するのであるが、七日、八日と大坂落城の時まで、ここが徳川方にとって重要な拠点であった。したがつて岡山を中心とした四條畷の村々には関東勢がひしめき、当時の村人にとっては大変なことであつたであろうと想像するのである。

石造の遺物

これが逢阪の五輪塔である。

五輪塔は、密教において創始され、五つの部分からなつており、上方から、空・風・火・水・地をあらわす五輪となり、平安時代の終りころから見えはじめ、鎌倉時代・室町時代にかけて全国的に造られるようになつた供養塔で

逢阪の五輪塔

一六三号線を東にむかい上清滝をすぎ、幾まがりかの坂道をのぼりきると、逢阪の家並が見えてくる。

ここは、ちょうど田原との中間にあたり、昔から清滝街道の脇にあるところである。今は、採土のダンプカーの砂ぼこりが、家の屋根瓦や、沿道の樹々にこびりついているが、以前は緑につつまれた静かな脇の村であつた、逢阪のバス停からしばらく行くと、案内に向う上り坂が右側に見える。その道を約百メートルほどすると、右側に立派な五輪塔と、小さな石仏数基が安置されているのが見える。



逢阪五輪塔

ある。

この達坂にある五輪塔は、花崗岩で作られ、空輪の頂部から地輪の最下端まで約一米、鎌倉時代の様式をよくととのえ、均整のとれた立派なものである。しかも塔の道に面した地輪の部分には、

向つて右から

大坂一結業

延元元子三月 日

造立之

の文字が刻まれており、晴天の十一時頃にこの塔前につづき、はつきりと読みとることができる。（ここで大坂とは大阪市のことではなく達坂のことである。また延元元年は西紀一三三六年）

今から約六百四十年前の姿をそのまま文字として残すことの立派な五輪塔は、北河内地方でもまれに見る五輪塔として、私たちが大切に保存すべき貴重な文化財といわねばならない。

故平尾兵吉先生は、この五輪塔の主は誰かということに

ついて、田原城主田原野馬守の位牌、過去帳等、また延元年が、植木正成が漆川での戦死の年にあたっていることなど詳細に、「北河内都史蹟史話」の中でのべておられる

田原・住吉神社

境内の石風呂

本市上田原の天野川畔から八の坪にいたる古堤街道その景観は、だれもが、この道を歩いて美しいなと感嘆する地域である。左に生駒市の北端丘陵の森と静かな家のたたずまい。右に住吉神社の赤い鳥居と美しい森、そしてそれ以後く家々の姿、正面は田原城址と西に継ぐ緑の山々、その間に満開の桜の古木、かえでの若芽、本当にこのまま本市の美しい地域としていつまでも残しておいてほしいと願う気持は私一人ではあるまいと思つ。

ここ住吉神社の朱塗りの鳥居をくぐり境内に入ると、左



石風呂

手に大きな石槽を見ることができる。花崗岩の巨石を加工したもので、長さ二百粁、幅百十粁、高さ七十三粁、どつしりとおちついた形で、上面の長さ百二十四粁、幅七十七粁のだ円形をそのままほりくぼめ、深さ六十粁の槽を造っている。そして底の一端には、小さな穴をうがつて水ぬき用としている。この石槽の内部はていねいにタガネでけずられ、その跡も美しく今に残されている。槽のふちは、平均十二粁でなだらかにけづられ、約三十粁さがつた所から下は自然のままになつており、この線から土中に埋められ、水ぬきのところは排水のため、溝ともすんでいたのではないかと考えられる。

この槽は、そのつくりの様子、水ぬきの穴などから、多分鎌倉時代の石風呂であつたであろうと推定される。現今のように入れてわかす風呂ではなく、この浴槽を土間にすえつけ、まわりに磚（れんが）か板石を敷き、覆屋を作り浴殿の形をとり、浴槽には湯をそそぎ入れて使用したものであろう。

かつてこの石槽は、四日市街道工事中天野川畔から出土

したもので、その後この住吉神社に搬入されたと聞く。今となつては、天野川畔にいたるまでのこの石槽の足跡はさだかではない。しかし、この石槽は、四天王寺境内のものとともに府下でまれな完全な形の石造遺品として、昭和四十八年三月に府の文化財として指定されており、本市にとてもまことに貴重な石造遺物である。

十三仏石塔

と刻まれている。天文五年は今から約四百四十年の昔、室町時代の終りごろで、これより約十年後にはボルトガル人の手によって鉄砲が伝来するのである。

この名号碑の東側には、高さ約一・八米、花崗岩質の碑面に、十三体の仏像を浮き彫りにしている十三仏像がある。右仏の左右両側には

奉造立十三仏逆修念佛諸一「諸州八十人同本願觀海上人、天正十八季六月八日敬白

の文字が刻まれている。天正十八年は、豊臣秀吉が全国を平定した頃であり、觀海上人は、清瀧にあつた旧正法寺の住職で、南北朝以後、焼失しあれはてた寺院を再建した人である。したがってこの二つの碑は、元和八年、中野に現正法寺が移される折に、清瀧からこちらに移されたものであろう。

あるう。

右側に

三界十五有六道四生含藏

左側に

千時天文五年四月吉日敬白

この名号碑といい、十三仏の石像といい、いずれも室町時代から江戸時代のはじめにかけての庶民の信仰を知る上でも大切な遺物である。十三仏は、碑文にもあるように、觀海上人のもとにあつまつた八十一人の人達の手によつて

これを建立されたのであって、逆修とは、生きている間に、自分たちが死んでからの往生菩提を願い祈ることである。逆修講を村々でつくり、それら逆修を願う有志の人たちの信仰は、この十三仏の石像に表現され、刻まれた文字とともに現在に伝えている。



正法寺石造遺物（左：名号碑 右：十三仏）

十三仏の石塔は、南野の弥勒寺境内西端にもあり、高さ二米、永禄二年七月八日、逆修講十三人によつて建てられている。また田原住吉神社境内西側には、石の地蔵像とともに十三仏石塔があり、松の木蔭で長い年月の面影を静かに残している。

砂・岡山キリシタン タンと制札

砂・岡山キリシタン

今から約四百三十年前の一五四三年にボルトガル人が九州種ヶ島に漂着、はじめてわが国に鉄砲をつたえた。それから六年目の一五四九年、ザビエルが来日し、キリスト教をわが国にひろめるきっかけをつくった。

はるばるわが国に渡航した熱心な宣教師たちは、九州を中心新しい科学技術、特に天文、地理、医学などを紹介しながら、瀬戸内から大阪、京都へとキリスト教をつたえた。当時のわが国情勢は、各地に群雄が活躍した戦国の

時代であった。この時代の終末、織田信長はキリスト教を保護し、京都や安土に教会を建てる許しを許した。やがて豊臣秀吉が全国を統一して後、一五八七年キリスト教を禁するまでの約四十年間は、熱心な大名の保護もあって、キリスト教は全国的にひろまつていったのである。

さて、このような状況の中で、私たちの四條畷ではどうようであつたであろうか。この頃、飯盛山には三好長慶が居城しており、その勢を近畿一円にふるっていたが、長慶も当時の状勢の中でキリスト教を保護した。城下に布教を



クルス青銅像（市史より転載）

許したのが永禄二年、一五五九年のことである。その家臣の結城忠正をはじめ多くの人たちが洗礼を受け、熱心なキリストンとなつた。飯盛城はもとより、砂、三箇にも教会

堂が建てられ、外人の宣教師も姿を見せた。教会には結城氏があり、熱心な布教活動が行なわれた。

長慶没後も活動は発展し、砂の会堂は改築され、岡山会堂として高山右近の高櫻、大東市の三箇とともに、近畿におけるキリストンの中心地となつていていたのである。やがて信長に代つて秀吉の時代になり、岡山の結城氏は小牧長久の戦で戦死、すでに三箇教会のなきあと、その拠点であつた岡山教会も消滅の運命をたどつた。

その後間もなくキリスト教は禁制となつたが、当地方で

も信仰は潜伏しつつも続いていたことであろう。

三箇にあるキリストン跡ろう、数珠、本市の旧家から出たとつたえられる青銅のクルス像などからこの間の消息をうかがい知ることができる。

制札

定

何事によらず不宜事に百姓人勢申合候を徒党といふとどうしてしひて願を立るを強訴といふ或は申合村内立のきをてうさんと申前々より御法度の条右類之儀有らば居村他村にかきらす早々其筋の役所に申出へしこ褒美として

ととうの訴人 銀百枚

こうその訴人 同 断

てうさんの訴人 同 断

(以下略)

これは、清浦の小西慶吾氏宅にながく保管されてきた江戸時代の制札の前半部の文面である。末尾に明和七年四月奉行と書かれ、当時の領主久賀氏の名のあつたものが、後



制 札

定

の代官小堀数馬に書きかえられている。
またキリスト教禁制についての古い制札も残されており
これには次のように書かれている。

きりしたん宗門は累年御禁制たり自然不審成ものあらハ
申出へき事

はてれんの訴人 銀五百枚

いるまんの訴人 銀三百枚

立かへりの訴人 同 斷

同宿井宗門の訴人 銀五百枚

右可被下之候同宿宗門之内たりといふとも訴人に出品品
により銀五百枚可下之かくし置他所よりあらはる、にお
いてハ其所之名主井五人組一類とも可被處嚴科者也仍而
下知如件

天和二年五月 日

奉 行

從公儀被仰出之趣領内之禁誓可相守もの也

と記されている。この二つの制札文面は、ともに仲々き
びしいものであり、賞金を与えて密告せようと/orするもの
で、徒党、強訴、逃散、キリスト教の嚴禁等、徹底したや
り方があががわれるものである。

これらの制札は、単に掲示板といったものではなく、庶
民が守らなければならぬ様として大きな権威をもつてい
たものである。そしてこれらは、江戸時代全時期を通じ、
明治のはじめまで村々の人通りの多い、古くから「札場」
といわれてきた場所に掲げられていたのである。

觀音さまと薬師さま

大正寺の聖觀音像

今から約千四百四十年前、欽明天皇の七年、百濟からわが国に仏教の經典と仏像が渡来、そのうち聖德太子の手によつて仏教はひろまり、奈良、平安、鎌倉……と長い歴史をたどりつゝ現在に至つている。この仏教の信仰とともに、仏像も定期をはじめ多くの仏師たちの手によつて作像され、現在に残されてきている。

仏像は、その造り方、材料によつて、铸造（法隆寺觀音三尊、東大寺大仏）、土をひねつてつくる塑像（法隆寺五重塔内仏像、二月堂日光、月光菩薩）、麻布と漆で何枚も

はり合わせてつくる乾漆（三月堂不空羂索觀音）それに木彫（平等院阿弥陀如來像）、石像（白村市石像群）にわけることができる。そのうちわが國仏像の主流をなしてきたのは一本の仏一すなわち木彫佛である。

東の山から緩く洪積期の忍ヶ岡にある大正寺は、北に岡山新池、讚良寺の旧跡、つづいて宍屋川、枚方の丘陵を望む景勝の地に所在している。法然上人の弟子、西仙房が河内國讚良の長者のお寺を創建して、仏に仕えたのがこの大正寺のはじまりと聞く。

本堂に向つて左に觀音堂があり、この中に本影の聖觀音像が安置されている。仏像は、台座を含めて頭頂までの高さ約有九十釐、ながい年月の重みのためであろうか、香持によつてほんと黒くなっているが、造像当初は美しく彩色されてあつた模様で、ところどころ絵具のあとを見ることができる。ふくよかな顔相、まろやかな肩の曲線、そのお姿全体から平安時代の終り頃に作像されたものであろうと想像する。

この聖観音像は、もと岡山の見性寺の觀音堂にあったものが、同寺の廢寺と共にこの大正寺に移されたものと伝えられる。岡山には、白鳳時代、讃良郡の都司の手によって



大正寺聖観音像

建立されたと考えられる讃良寺があり、この大正寺から北、二百米のところに遺跡が所在している。今までの調査では、その創建当初の事柄は若干判明しているが、その後のことについてはまだ明らかではない。しかし、この讃良寺が、清滝の正法寺と同じく鎌倉末期まで存続していたものと思いつて推測すれば、讃良寺—見性寺—大正寺との聖観音像の足跡を見ることができよう。

大正寺本堂前の松風をきき、本市最古の聖観音像に對する時、おのずと合掌し、四條畷のながい歴史に想いをはせるのは私だけではあるまいと思う。

正傳寺薬師如來像



正傳寺・薬師如來像

仏教伝来後、奈良時代にかけては、銅に鍛金をほどこした金銅の仏像や乾漆像、塑像がその主流をなしている。このことは法隆寺をはじめ奈良を中心とするこの時期の各寺院の本尊像の多くが金銅、乾漆、塑像のものであることからもわかる。ところが平安時代になると、これらの仏像は、ほとんど造られなくなり、これに代つて木彫の仏像がその主流となつてくる。これには色々な理由もあるが、木の素材をそのまま生かした木彫の仏像は、仏教の日本化と共に日本人に一番ふさわしい姿として受けとめられたのではあるまい。

田原小学校をすぎ、しばらく南に行くと、右手に正傳寺の屋根を見る事ができる。

右に折れ、少し坂道をのぼると山門、天の川、奈良側の田原の家々を一眺におさめる景勝の境内、本堂の右側には薬師堂があり、ここには薬師如来の立像が安置されている。

—仏像の前に端座する—

仏像の高さは約二米、光背は約一米五十種、蓮華の台座にいますこの薬師如来のお姿は尊く、そのおだやかなお顔、玉眼の目じりの切れ、肩から胸への線、全体のお姿から、鎌倉時代に造られた木彫の仏像だとされている。

「この薬師如来は、もと、森福寺と号する上田原所在の真言宗寺院境内」にあつたことが天保十五年明細帳に見える。森福寺の記録としては、森福寺僧頼恵が受領した天文二年（一五三四）付の「神道秘事書なる古文書があつて、戦国期まで遡る寺院であることを証し得ても、現在廢寺となつて、跡起を語る史料も存在しない」（四條畷市史）

ながい年月の流れの中で、この薬師如来は、多くの田原の人たちから病氣平癒の祈願を受け、その苦しみを救つてこられたことであろう。

田原の里

田原の情景については江戸時代の中ごろ、貝原益軒がこの地方を旅行した紀行文、南遊紀行に「岩舟より入りて、おくの谷中七八町東に行けば、谷の内頗る廣し、その中に天の川なる、其里を田原といふ、川の東を東田原と云、大和國也、川の西を西田原と云、河内國也、一瀬おせの中にて両国にわかる、川を境として名を同くす、此谷の南より北に流れ、又西に転じて岩舟に出で、ひくき所に流れ天の川となる、凡田原といふ所此外に多し、宇治の南にも奈良の東にもあり、皆山間の幽谷の中なる里なり、此田原も其入



田原の里

口は岩舟のせばき山間を過て、其おくは頗るひろき谷なり、恰も陶淵明が桃花源記にかけるが如し。と記しており、まことに別天地としてその眼にうつたことをよくうかがいしがことができる。

現在でも、六二号線を東に、逢坂をこえて田原に入ると、本市の西方平地とくらべてすい分と空気も澄み、緑の山にかこまれた家々のたたずまいに接することができる。

天の川

本市の田原と奈良県田原との境界を流れるのが天の川で、昔は甘の川とよばれ、西北磐船の渓谷を流れ、交野市の平地をうるおし、枚方で淀川にそいでいる。磐船は、天孫降臨の神話をつたえている。すなわち、磐達日尊が天照大神の命をうけて、天の磐船に乗って河内国跡が峰に天降ったという話である。このことは、弥生時代の農耕文化の渡来發展を物語る神話として受けとめることができよう。こ

の磐速日尊は、生駒東方鳥見の地方に勢力をのばし、その子孫物部氏は、田原一帯から磐船の渓谷をくだり、交野、枚方地方へ播作の文化をひろめてゆくのである。

磐船神社は、巨石を神体としてまつり、天の川周辺の神社はこの磐船神社を總社としてきた。田原は、天の川の上流にあって、大和から交野への物部氏發展の前進基地であつたことができる。

やがて平安時代になると、都が京都にうつり、桓武天皇をはじめ平安貴族の文野遊観などがあり、当時の星を祀る行事などから、むかしの甘の川は天の川となり、乾田は星田に、甘田神社は天田神社にかわり、倉治の櫻物神社を織女星にみたて、香里園地にある中山觀音寺の大石を牛石とし、枚方にはかささぎの橋をかけ、天上の天の川をそのまま地上にあてはめ、この天の川流域を別天地としてみたてたのである。

田原の里は、その地理的位置からみて、日本國家成立のころから天の川とともに古の讀良、交野と大和との交流の重要な位置にあつたといえよう。

さぎそうの 花咲くほとり

室 池

飯盛山の北端、御机神社と龍尾寺の山の間を権現川に沿つて登って行くと、やがて道は飯盛山裏側登山道と権現川筋と二つにわかれる。この道を権現川筋にとり、川とつかずはなれず登ると、権現滝の音がきこえてくる。滝を右手に山道をなお登りつめると、清らかな水をたたえた室池の堤防に出る。



室 池

室池とは、古池、中ヶ池、砂溜池、新池の総称で、総面積十七ヘクタールの広さをもつ池のことである。

古記録には、冬のきびしい寒さの頃にこの清らかな水が

氷となつたのを切り出し、山間の室に貯蔵し、これを夏に京都まで運搬をしたことが記載されている。したがつて、

この室池の名は水を貯蔵する水室にちなんでつけられたと考えられ、この池の古い歴史をそのまま物語つてゐる。

この池は、水が豊かなことから、灌溉用としても重要な

用途をもち、権現川筋の多くの川をうるおしてきた。その

後安政年間にさるに擴張され、上村専右衛門、田中平右

衛門その他地元の有志の人たちの大好きな尽力によつて、現在の新池が築造されたのである。

昔は数多くの鳥たちもこの池の周辺に巣を作り、冬期には渡り鳥が羽をやすめるのに格好の場所であつた。特に枚方市の山田池とともにこの室池の鶴は、北河内地方の人たちに親しみをもつて繪られてゐた。

また、この池の周辺の湿地帯には、多くの植物の群落があり、夏になると白さきが羽をひろげて飛ぶ姿そのままのかわいいサギソウをはじめ、ウメバチソウ、ミミカキグサ、タヌキモ、ハンゲショウなどミズゴケとともに静かに花を

もつ姿がみられる。

近年の土砂の採取は、この室池の周辺にまでおよび、本市での緑と水の代表ともいへべきこの一帯も、發うべき現状となつてゐる。この池の美しい自然の姿をいつまでも残してほしいと願う気持は、市民のみなさんの大きな願いの一つである。

宝曆の絵地図

現在、市史編さん室には、二重の箱に納められた大きな古地図が保管されている。これは、南野の西川弥三郎氏宅に以前から保管されていたもので、東は室池から西に敵森山、南野、北条一帯の権現川すじをえがいた絵地図である。地図の大きさは、たて二米四十五畳、よこ一米七十八畳、じょうぶな和紙を何枚もつなぎ合わせた極彩色のもので、色も九色に分け、此色・山、此色・池とそれぞれ註記がつけられている。また余白には必要事項の記載がなされ、右下

に南野村ならびに北条村の各庄屋、年寄、百姓代の署名が見られる。註記の終りには、この地図ができるがつた年月が書かれており、今から逆算して約二百二十年前の宝暦四年九月となっている。室池、飯盛山等、東の山々の様子、この地図の中心である権現川の流路と水田、詳細な水路はもとより村落の配置など、実に綿密正確にえがかれており、

昔の南野村、北条村の様子を知る上で誠に貴重な資料といふことができる。

ではどうしてこのような大きな、しかも詳細な絵地図が作られ、現在に至るまで保存されてきたのであろうか。

この地図を納めている桐の箱の箱書きを見ると、「南野村、北条村立會相繪図」と書かれ、関係書類とともに保管

されていたことがわかる。水

田耕作を中心であつたこの時

代では、当然灌漑の用水がい

かに大切であつたかは、今私たちが想像する以上のものであつて、農民にとって死活にかかわる最重要的のことであり、それ故に日照りの続く夏にはこの用水の取水をめぐつて争いが起り、時には流血の惨事にまで發展することもあつたのである。実はこの絵地



南野村・北条村立合相繪図

國も南野村と隣の北条村との水争いの結果作成され、後世に伝えられたものなのである。

室池ならびに東の山々から流れる水は、集つて権現川となり、南野の田をうるおし、さらに北条村の田にそそぎ、昔の深野池に流れていった。この水こそ両村の水田耕作にはなくてはならない水であった。

寛延三年（約二百二十五年前）の夏、日照りの後に降ったわずかの雨水をこの権現川の水量に期待し、両村が中津川井戸の分水について水争いを起こしたのが事のはじまりであつた。争いはその後両村の当事者だけではまとまらず、大坂奉行所へ訴願、以前、元様のころ起つた水争いの裁決をもとに仲裁案が出されたが、これもうまく運ばず、ついに江戸評定所までこの件が持ち出され、事件発生後六年を経過して、応の決着となつたのである。

この絵地図は、その訴訟の訴訟書類の内の大重要な一つとして作成されたものであつて、両村の諸条件を入れながら約一年かかってできあがつたものである。そして地図その他関係書類は「村方御檢地帳」に添付され、所蔵するべく候。

猶又後世に至る迄、紛失之れなき様に致さるべく候」として申しあげられて今日に至つたのであって、今もなお当時の村々の人たちの苦惱を私たちに語りかけている。

線路にそつて

古い井戸

生駒山系の第一列は、飯盛山よりその方向を北北東にかえ、星田へとのびているが、その急峻な西側斜面によりそうよう、洪積期の丘陵がひろがっている。京都の東寺より高野山に至る東高野街道は、北から南へこの丘陵をよこぎっていた。また、雁屋・堀溝より西南方には、広々とした深野池が江戸時代の中期まで水をたたえていた。

この岡山・清瀧の山すその丘陵地をよこぎる東高野街道の一帯は、原始の昔から今日まで、私たちの祖先が数多くの生活のあとをしるしてきた地域である。



尖頭器
(岡山南遺跡出土)

以前にも多少の調査が行なわれ、これの解明の手がかりはなされてきたが、昭和五十年秋よりの片町線複線化に伴う調査（坪井遺跡、忍ヶ丘駅前遺跡（枚方信用金庫用地等を含む）、南山下遺跡、奈良井遺跡）や、打上より南下するバイパス工事に伴う調査（岡山南遺跡）からは、数多くの出土遺構、出土遺物を検出し、本市の歴史の空白部分を埋める大きな役割を果すと共に、北河内地域の古代史の解明にも多くの資料を提供してきた。

写真の石器は、ともに岡山南遺跡調査中に、遺構大溝の深部の砂層から発見された旧石器時代に属する尖頭器で、たて十・九厘米、よ二三・七厘米、厚さ一・五厘米、当時の道具

としてあらゆる用途に使用されたものである。最初の項に述べた讃良岡山遺跡出土の旧石器と同じ時代の石器がこの地点でも発見されたことは、一万里以上も前の四條畷を知る上で実に貴重な発見といわねばならない。

さて、今回の一連の調査では、各遺跡とともにその遺構の中で、井戸の発見が数多くあったことは注目に値するものである。坪井遺跡では七基、駅前遺跡（周辺を含む）では四基、南山下遺跡では二基、奈良井遺跡では五基、岡山南遺跡では一基、計十九基を数える。

調査地点から考えると、東西に傾斜している洪積層の地形であるため、雨水はいずれも東から西への流路をとり、大雨の時は、大量の土砂と共にその時代の遺物も流されて堆積したものと思われる。（古墳時代）、やがて後世（鎌倉・室町時代）に、かつての伏流水を求めて井戸が掘られ生活の用に供することになったのであろう。

井戸の種類は、素掘りのもの、木枠でかこい、底に檜のまげものを入れてあるもの、石組みで、底にまげものを入れてあるもの、木枠で底が瓦づみのもの等に分けることが



井戸の断面（南山下遺跡）

できる。これらは古墳時代から室町時代に至る各時代の井戸で、それぞれの時代の井戸の標本を見るおもいがする。私たちにはこれらの井戸の調査の途上、古い時代にこの地に住んでいた人達が、この井戸端で会話をしたであろうその声を、後世の今、それを耳にするような気持さえしたのである。

木簡

当時の土器などと共に、木簡(木の札に文字を書いたもの)が八点出土した。その内容は…………まいり日記・水牛・三斗六升等が記されており、駒前の枚方信用金庫敷地の大溝の遺構からは、下駄・梶の子・ヘラ・箸などの木製品と共に、「鬼急刻」と書かれた呪術木簡が発見された。また、坪井遺跡で発見された井戸からは、まげものの底板、大蓋、瓦器、灯明皿などと共に、「こむぎ三斗六升」と書かれた木簡と、△△を組み合わせた呪術木簡が発見された。

いずれも中世の頃の井戸からであり、このあたりは、岡山の古い村あの一部と推定されているところから、当時の生活の様子を知る上で貴重な資料となっている。

家型の埴輪

各遺跡から検出される古い井戸の遺構を発見するたびに、調査團では、井戸の遺構以外に大きく期待をするものがあつた。それは、これらの井戸の底から何が発見されるかということである。昔、井戸を使用していた折に、あえて井戸に投入れたもの、あやまつておとしたもの等、當時の生活の様子を知る上で、貴重な資料が発見される場合があるからである。

はたしてその結果はでてきた。忍ヶ丘駅前遺跡からは、

らは、平安時代のものと考えられる多くの柱跡の下層から古墳時代の遺構と多くの埴輪が検出された。この遺跡より北西の坪井遺跡からは、多量の円筒埴輪の集積層がみられた。



柱穴・溝状遺跡（岡山南遺跡）



變形土器出土状況（岡山南遺跡）

これらの事実は、この付近に明らかに、かつて古墳が所
在していたことを示している。さきにのべた忍ヶ岡古墳は、
古墳時代前期の古墳として有名であるが、これに続く時期
に、この岡山南遺跡近くにもう一つの古墳が築造されたの



家型埴輪出土状況（岡山南遺跡）

であろう。墳丘はけずりとられ、その形態は不明であるが、
今回出土の多量の埴輪は、そのことをうづづけている。

岡山南遺跡出土の埴輪は、円筒埴輪をはじめとして、朝
顔型、きぬがさ型、馬型、そして家型などの象形埴輪で、
特にこれらは、当時の有力な資料でもある。

写真の家型埴輪は、北河内地方では、交野高校敷地の車
塚古墳、ならびに大東市堂山古墳からそれぞれ一部分出土
の例があるが、今回のようにその大部分が出土したのは、
はじめてのことである。

忍ヶ岡古墳、今回の調査から推定される岡山の古墳、こ
の時代の住居跡の遺構などから、片町線の線路にそった岡
山から中野にかけての一帯は古代にいちはやくひらけ、な
がい歴史をもつ地域であることをうかがい知ることができ
る。

あとがき

昭和四十五年九月、市教委からのお話もあって、本市の広報紙に「暖の歴史・暖の文化財」の標題のもとに筆を執ることになりました。十回を数える頃から、暖古文化研究保存会のみなさんをはじめ、多くの市民のみなさんからはましのお言葉をいただきつづその後三ヶ年半、この稿は四十一回を数えました。

このたび、市当局のお骨折りで、今までの稿をまとめて小冊子として、市民のみなさんに再読していただくことになり、ここにその刊行をることができましたことは、私といたしまして本当に大きなよろこびでございます。

はるか原始のその昔から、連綿と続いた私たちの郷土の歴史を、今この日で見る文化財を通して手みじかに知つていただこう。そして昔からおいでの方々からは、この稿の中からさらになつかしいふるさとのお話を聞かせてい

ただこう。また、近年になつてお住いになつた方々には、私たちの郷上の歴史を少しでも多く知つていただこう。できれば中学生のみなさんの郷上学習の補助教材ともなれば……そしてやがては美しい郷上愛として昇華されれば……などとねがいながら筆を執らせていただきました。

毎月一回の限られたスペースでしたので、十分とはまりませんでしたが、それでも精一杯書かせていただきました。小冊子となりますと、一つのまとまりも必要ですので、少々組立てをかえさせていただきましたが、本文の補筆はできるだけさけ、当初のものを尊重いたしました。お読みいただきまして不備な点が多々あるかと存じますが、どうぞご指摘、ご指導をいただきたく存じます。

終りになりましたが、編集発行にお力添えいただきました市当局関係の方々、その都度ご指導賜わりました片山長三・山口博・瀬川芳則・中田勝三・中島敏子の各先生方、ならびにましのお言葉をいただきましたみなさま方に深く深くお礼を申しあげ描筆いたします。

四條畷市・四條畷市教育委員会

畷の歴史・畷の文化財

- 執筆…………櫻井敬夫
- 編集…………四條畷市総務部
庶務課広報公聴係
- 発行…………四條畷市・四條畷市教育委員会
- 発行日…………昭和52年5月15日
- 印刷…………株式会社共英印刷